

**2012年度
活動報告書**

The Liberal Arts

2012年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

はじめに

教養研究センター開所 10 年を迎えて —— 学んで問いつづける教養教育のために

教養研究センター所長 不破有理

慶應義塾大学教養研究センターは 2002 年 7 月 1 日に開所されました。その設立の趣旨には、新たな教養教育の構築とその基盤たる「教養」の抜本的検討を研究課題として掲げています。開所から 10 年を経て、あらためて現在の教養研究センターが負う研究と教育の使命を考えてみたいと思います。開所記念シンポジウムの記録にはさまざまな方々の本センター設立にかける熱い思いが残されています。たとえば、「夢の教養教育とは」と問われ、答えて曰く「ソクラテス的な教育によって学生と教員、教員同士、学生同士が相互に啓発し合う場としての大学の実現」。この場合のソクラテス的な教育とは、単に教えるのではなく「問う」ことであり、対話によって考えを引き出し、形成をしていく教育を意味していると考えられます。教養研究センターが初めて設置した科目「スタディ・スキルズ」(アカデミック・スキルズに改称)にはセンター開設時の理念を読み取ることができるといえます。「アカデミック・スキルズ」は大学の 1、2 年生が初めて学問に触れる機会であり、学生が抱いた疑問を「学問」として耐えうる論に深めるために、教員とクラスの仲間たちはともに討論を繰り返し、文献を読み、さらに討論を重ね、四苦八苦しながら修正していきます。このプロセスの中で、学生同士、そして教員も学んでいくことになります。これをソクラテス的な討論の場と名づけることができるなら、教養研究センターの 10 年間はそれだけで存在意義があったといえるのではないのでしょうか。「学問とは学んで問うこと」であると「アカデミック・スキルズ」のテキスト執筆者の一人湯川武名誉教授は語っていますが、学び、問いを深める「夢の教養教育」が、アカスキの授業においてミクロコスモスを創造したことになるのですから。

教養とは、習得された立場である、と、カール・ヤスパースはその著『大学の理念』で記しています。大学において教養が成り立つとしたら、それは学問的な教養であり、ヤスパースの言葉を借りれば「学問性の態度」は専門知識や専門技能以上のものであり、その「学問性」には、懐疑と問いかけ、断定的な主張への警戒、自分の主張の妥当性の限界を知ることであり主張の客観的な検討を恒常的に続けることが必要であると述べています。それが学問的な態度であり、理性への教養であり、この精神的な活動が止まった途端、硬直化してしまうとの警告も添えられています。アカデミック・スキルズとは、単に学生を大学という教育に適応させるための技法を教えるのではなく、学問的思考を体得することによって社会の問題を解決する人間に育てることにつながるでしょう。しかしさらに重要なことは、そのような功利的な意図でのみ学問をするのではないことを学ぶこと、人間として生きていくために、自分の周りで起こっている事象や流布している言説に対して問いかけを発し続けることができること、そして自己を相対化する思考を鍛えることが教養教育の基盤であると考えます。

日吉キャンパスは、地理的にも慶應義塾全体の中間に位置するキャンパスです。今後のキャンパス間交流、学生教員双方のレベルにおいて、研究教育の交流を深める研究体を作っていくことが、教養研究センターに求められる務めの一つでありましょう。研究と教育の統合が大学教育の第一の原理です。2012 年は大学の今後を占う試金石にもなりうる問題として論議されたのは、秋学期入学に表象される学期制の問題でしょう。その議論の根底には現在の大学教育の在り方に一石投じたいという様々な教員の

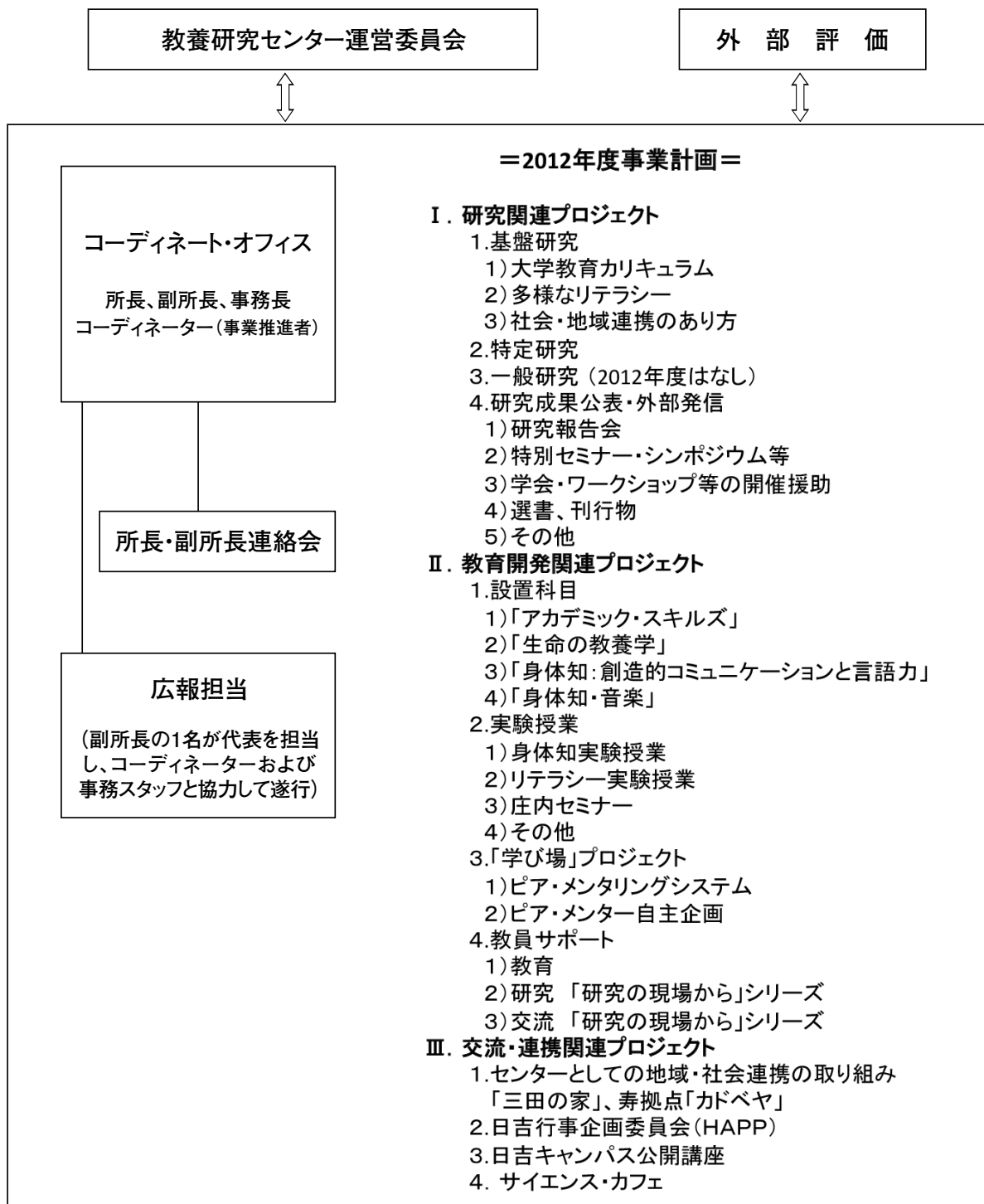
思いが重なっていると考えられます。10年前の開所シンポジウムにおいて、すでにアメリカの大学は日本の大学のライバルであるという意識を持つべきだという指摘がありました。優秀な学生の取り合いは日本国内の問題だけでなく、英国の名門オクスフォードでさえ（いや、だからこそ、といえるのかもしれませんが）起こっている状況です。慶應義塾は翻って、どのような国際化を考えているのでしょうか。学期制の変更とどのようにかかわってくるのか、一年後のこの報告書をまとめる際にどのような思いが去来するのか、教養研究センターが担うべき教育と研究の歴史のよき新たな一年となることを願ってやみません。あらたに刻まれる教養研究センターの10年のために、皆様のご協力、ご指導をお願いする次第です。

目 次

はじめに	03
組織構成と事業計画（2012 年度）	06
2012 年度事業報告	07
開所 10 年記念企画	11
広報・発信	14
I 研究関連プロジェクト	
1 カリキュラム研究	16
2 学びの連携プロジェクト	18
II 教育開発関連プロジェクト	
1-1 アカデミック・スキルズ	21
1-2 身体知：創造的コミュニケーションと言語力	22
1-3 生命の教養学	23
1-4 身体知：音楽	24
2 エディティング・スキルズ	25
3 「学び場」プロジェクト	26
4-1 教員サポート講演会	27
4-2 研究の現場から	28
5 庄内セミナー	29
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 三田の家	30
2 カドベヤ	31
3 日吉行事企画委員会（HAPP）	32
4 日吉キャンパス公開講座運営委員会	34
5 サイエンス・カフェ	36
資料編	
1 教養研究センター運営委員会委員	37
2 教養研究センター組織構成員	38
3 2012 年度 of 主な活動記録	39

※ I～III の分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1 つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを 3 つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

大学教養研究センター組織構成と事業計画(2012年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。 所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

教養研究センターは2002年7月1日に開所されて以来、10年目という節目を迎えた。開所10年企画事業を立ち上げ、これまでセンターが培った研究と教育面の10年間の実績を振り返るとともに、より広くセンターの活動を広げ、所員の参加を促進すべく、公募企画も推進した。

1. 開所10年記念企画

1) 公募企画 映像ミニ講義シリーズ「はじめてのアカデミック・スキルズ」

昨今、iTunes-Uに代表されるように、ネット配信される大学の講義が海外ではことに充実しつつある。日本の大学では未だ、映像発信で気軽に見られる初心者向けの学習コンテンツが少ない。この認識の下、吉田恭子前副所長が中心となり15本の映像ミニ講義が制作された。講師は「アカデミック・スキルズ」担当経験者と日吉メディアセンター（図書館）、撮影編集はデジタルメディア・コンテンツ統合研究センターが担当し無事YouTube上で世界デビューを果たすことができた。本シリーズは、教員がレポートや論文を課した際に学生に予習や復習として視聴させたり、導入教育の教材としても利用できる。大いに活用していただければ幸いである。教養研究センターのウェブサイトにおいても公開されている。詳細は吉田恭子(文学部)による項目を参照されたい。

2) 『アカデミック・スキルズ』書籍シリーズの刊行

「アカデミック・スキルズ」の成果をまとめた書籍として、2005年に『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』が刊行されて以来、全国の多くの大学で活用されている。「アカデミック・スキルズ」(略称：アカスキ)の授業の改善点を追加した第二版が刊行された。さらに、アカスキ発の学びのスキルを書物としてもシリーズ化していくことになった。「グループ学習入門」やアカスキⅢ・Ⅳとして設置された社会調査法のクラスから派生して執筆された「実地調査法」に関する書籍も刊行間近である。さらに、アカスキ修了学生たちによる学生の視点から「レポートの書き方」を論じる書籍も予定されている。アカスキ修了学生が中心となり、大学生が陥りやすいレポート作成上の困難をどのように克服するかについてわかりやすく解説する。学生の学生による学生のためのレポート執筆法で、学び場プロ

ジェクトとして始まったピア・メンターによる学習相談の発展的な副産物ともいえる。

3) 公募企画 公開講座

公開講座「日本ってなんだろう」と連動企画：東北復興支援「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」

教養研究センターは社会・地域連携の一環として日吉キャンパス公開講座を運営してきたが、より多くの教員にセンターの活動に関わっていただきたいという意図も込めて、開所10年を記念してテーマを公募した。その結果、津田眞弓(経済学部)と長沖暁子(経済学部)の東北復興支援企画と安田淳(法学部)の中国講座の企画が採択された。東日本大震災によって改めて日本のアイデンティティを問い直すべく、「日本ってなんだ」と題した公開講座と東北への旅「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」を連動企画として立案した。震災で被害を受けた東北の現状と復興の先へ目をむける体験を共有していくことは、今後の日本を考える一日本人として意味ある営為であり、そのような企画を推進していくことは、社会・地域連携を学びの場に還元する教養研究センターの活動として位置づける意義があると考えたためである。公開講座では初回到東北学の提唱者である赤坂憲雄(学習院大学教授)に講演していただいた。時間軸を縄文時代へ巻き戻し、北から南をあらためて眺めることによって、中央と辺境の図式に依拠することなしに、東北の深層に迫ることができる。このような異なる視点から歴史を捉えなおすことによって、日本を新しい未来にいざないたいという願いを込めて実施した。「学びの旅」は公開講座の講義による学びを現地での体験に結びつける企画であり、「義経・西行・芭蕉のみちのくを歩く」コースと「古層のみちのく——縄文文化に学ぶ」コースが設定された。実施に至るまでJTB法人東京の本郷吉之助氏と伊藤充彦氏の粘り強いご協力を得、旅の講師としては津田、不破のほか、寺澤行忠名誉教授、石川透(文学部)、須田英一(矢上キャンパス文化財調査室)が同行し、現地での講演・解説を行った。企画段階で長沖、伏見岳志(商学部)にご協力いただいたクリシタンと南三陸関係の企画は残念ながら定員に及ばず実施されなかった。縄文コースの実施にあたっては、安藤広道(文学部・考古学民族学研究室)にはコース設計から現地での講師の方々へのご紹介まで多々にご尽力いただいた。柴田浩平(教セ前事務長)、山口

中(教セ事務担当)には立案段階の手順や提案、JTBとの話し合い、現地との連絡まで、もろもろの事務手続きを進めてくださった。慶應カードへのダイレクトメールやプレスリリースなど新しいコンセプトの広報も功を奏し、公開講座の参加者はやや減少傾向から大幅増加(218名→322名)に転じ、平均年齢もわずかながら改善された。

特別講座「中国を視る目を養う」は日中国交正常化40周年を記念して企画された。時宜に合ったテーマであったため関心も高く、4回シリーズではのべ220名の受講生が集まった。今後も公募企画などによって、日吉キャンパスの教員の研究と教育の成果を還元できる場を提供したい。

4) 学生論文コンテスト

慶應義塾大学の全学部1・2年生を対象に論文コンテストを実施した。より多くの学生に大学生として不可欠な学問スキルを習得してもらう機会を提供したいという思いのもと、開催された。柴田浩平(教セ前事務長)の熱意によって、論文コンテストの運営全般に多くの仕掛けが準備された。前事務長自ら、論文の書き方本を渉猟、おすすめ本のリストを作成し、センターの特設ウェブに掲載、大学生協の書籍部に展示もお願いした。各キャンパスにコンテスト・ポスター、チラシを配布、講演会には具体的には、テーマは敢えて抽象的なものとし発想の自由さを求め、事前登録から論文原稿の締め切りまで、二回の論文書き方セミナーとメールマガジンによって論文執筆のサポートを行った。事前登録は200名近かったが、論文完成にこぎつけた学生は26名にとどまった。吉田恭子審査委員長ほか、覆面委員による選考の結果、最優秀賞は該当者なしとなったが、優秀賞として3名の学生が選ばれた。文学部1年の安部農君、文学部2年の小川将也君、法学部2年の青木みな実君である。論文は教養研究センターのウェブサイトに掲載されている。詳細は吉田恭子(文学部)による別稿を参照されたい。

5) 学びの連携プロジェクト

2011年度に大学としてどのような社会・地域連携が可能か、他キャンパスの事例から学ぶセミナーを開催した。これがきっかけとなり、「学びの連携」が始まった。2012年度はこの「学びの連携」をさらに進め、各キャンパスが蓄える学びの手法を紹介し、授



縄文の旅：須田先生



縄文の旅：コースターづくり



縄文の旅：上野集合写真

業に応用する実験的な試みを行った。6月23日には湘南藤沢キャンパスとの連携により、ケースメソッドの講義と実践を飯盛義徳(総合政策学部准教授)と西田みづ恵(大学院政メ研究科特任助教)にお願いした。この公開セミナーにもとづき、文学へ適用する実験授業が8月6-8日開催された。各取り組みについては種村和史(商学部)と大出敦(法学部)の別稿を参照されたい。9月29日には日吉にあるシステム

デザイン・マネジメント研究科(SDM)との連携により、第2回公開セミナー「学生の主体性を育む教育方法の探究——ポストデザイン・ポストシステムの方法論によるイノベーションの新たな地平開拓——」において、ポストデザイン思考・ポストシステム思考にもとづく社会システム変革のための方法論を紹介し、実際に「ヒヨウラをよくしよう」というテーマでワークショップを保井俊之(SDM 特別招聘教授)が中心となって開催していただいた。多くの参加者を得て、教員や学生がともに日吉という地域を考える試みとして大いに盛り上がった。Workshop-based Innovative System Design Methodology(ワークショップに基づくシステムデザイン方法論)、すなわちWISDMを文学へ適用する実験ワークショップは「システムで文学?——学生の主体性を育む教育方法の探究:アルフレッド・テニソンの詩「シャロットの女」をシステムで分析、みんなで創作するワークショップ」と題して11月3日に保井俊之氏の協力を仰ぎつつ不破が実施した。詳細は「学びの連携」の不破の別稿を参照されたい。SDMのワークショップ手法は、さらに11月10日開催の日吉リサーチポートフォリオ(HRP)において、日吉キャンパスを題材としてキャンパスのあり方を考えるワークショップへとつながった。

6) アカデミック・スキルズ OB・OG リユニオン

「アカデミック・スキルズ」では1年かけて共に学問作法を学び合った仲間同士、学部学年を超えたつながりが生まれる。センター開所10年を機に、横のつながりだけでなく、年度を超えた縦のつながりを加えることで、未来につながるネットワーク形成のきっかけを作ろうというものである。2012年度を締めくくるアカデミック・スキルズの成果発表会「アカスキ・コンペ」にて学事担当理事の長谷山彰理事と初代教養研究センター所長の羽田功(経済学部)に学生へのメッセージをいただき、2013年2月6日をまずは旗揚げの日とした。

2. 研究

基盤研究「大学教育カリキュラム研究」では、東京大学が秋学期入学の検討を始めるとの発表に伴い、本センターにおいても秋学期入学について研究会を重ね、公開講演会において学期制についての課題を共有する場を設けた。最初の講演会は2012年10月

30日に開催し、久保文明氏(東京大学大学院法学政治学研究科教授)には東京大学の秋季入学構想についてざっくばらんにお話をいただき、議論を交わした。さらに、3月には国際基督教大学(ICU)学長の日比谷潤子氏の講演会を行った。日比谷氏は慶應義塾に在職されていたためICUとの比較の視点から時間割や学期制の違いをご説明いただくよい機会となった。いずれの講演会も質疑が盛んに出され、関心の高さを見て取れる企画となった。また他キャンパスからの学事関係者も多く参加があり、学期制変更に伴う予想される課題などについて具体的な質問があった。本研究の取りまとめは佐藤望(商学部)が中心となり、慶應義塾の学期制変更へ代替案をまとめ提出した。本内容はアーカイブとして刊行予定である。

基盤研究「学びの連携」は上記の開所10年記念企画の一部として実施した。今年度より、キャンパス間のネットワークの構築とメソッドの学習と応用に力を入れた。上記および種村和史(商学部)の項目を参照されたい。

3. 教育関連

極東証券寄附講座として運営されている「アカデミック・スキルズ」は本センター開所10年企画において述べたように、2012年度は10年間の成果がさまざまな形で実を結ぶとともに、見直しを行った年でもある。学問研究に必要な多様なスキルに対応すべく、「アカデミック・スキルズ III/IV」が3クラス開設された。社会調査法に関する授業、映像を用いたアカデミック・スキルズ、および批評言語を用いるアカデミック・スキルズの3クラスである。しかしながら、社会調査のクラスと批評のクラスは履修者が伸び悩んだため、2013年度は開講せずとした。文学作品の解釈をもとに映像を創作するクラスは新たに「身体知・映像」として開講されることになった。社会調査法については、上述したように、講義に基づきその授業手法をまとめ、2013年度内に刊行予定であり、本クラスの成果を書籍を通して還元することになった。詳細は大出敦(法学部)による別稿を参照されたい。第3回「庄内セミナー」は2012年度未来先導基金を得て、一年ぶりに開催された。「庄内に学ぶ生命——いま敢えて生と死を考える」と題した今回のセミナーに学内外から社会人3名を含め、41

名の参加者を得ることができた。東日本大震災を経て、生命と死を改めて考えるという本セミナーの当初からの理念が、多くの学生の心にとらえたようだ。今回初めて取り入れた山伏体験は、一日のみというごく限られた時間ではあったが、山伏の白い衣装に身を包み夏にもかかわらず冷たい滝水に身を打たせ、無言で羽黒山を歩くことによって羽黒山の静寂を心身で受け止めた体験となった。最終日に鶴岡タウンキャンパスの最先端生命科学の研究活動見学で締めくくられた本セミナーは学生にとっても参加教員にとっても充実した4日間となった。詳細は羽田功(経済学部)の別稿、および「庄内セミナー」報告書を参照されたい。

4. 交流・連携 教員サポート

学部を超えてお互いの研究を語り、研究を広げる場を提供すべく始まった教員の研究交流の場「研究の現場から」は春1回、秋2回のペースで実施して2年目を迎えた。日吉に來られて間もない教員や留学から帰国した方々などの研究のお話を伺うこの企画も定着してきたが、さらに共同研究につながるような研究会も推進したいと考えている。「学会・ワークショップ等開催支援」の申し込みは年2回(1月と7月締め切り)公募をし、10件近くの応募がある。予算に限りがあるため、広報支援のみのケースもあるが、本センターの活動に関心を寄せていただく接点としても機能していると考えている。

交流・連携の取り組みのひとつ「カドベヤ」は2012年度未来先導基金を得て、教育GPからの事業を継続発展させている。活動内容は本センターの交流・連携プログラムにリンクされた「カドベヤ」のブログで見ることができる。三田に設けられた学外の学生・教員・地元の方々との交流の場「三田の家」は所有者の都合により事業の見直しを行っている。坂倉杏介(文学部・教セ・グローバルセキュリティ)が活動を港区より委託された「芝の家」に拠点の軸足を移しつつ、2013年は活動をするようになる予定である。「三田の家」についての詳細は熊倉敬聡(理工学部)による別稿を、「カドベヤ」については横山千晶(法学部)の別稿を参照されたい。

(不破有理)

1 論文コンテスト

教養研究センター開所10年記念の一環として、柴田事務長(当時)の発案で、学生論文コンテストが開催された。

コンテストの目的

- ・大学の学びの基礎である論文執筆に焦点を当て、センター設置の授業やセンターの初年次教育理念との連携を図る。
- ・比較的高額の賞金で話題作りをし、論文執筆に自発的に興味を持たない学生も巻き込む。
- ・事前エントリー制度を導入することで、単なる完成論文評価のイベントでなく、論文作成スキル習得のための学習環境・機会を提供する。
- ・外部スポンサーの参加で、大学外との連携を強めると同時に、学生に広く社会を意識してもらう。

コンテストの特徴

- ・慶應義塾の全キャンパスの大学1、2年生対象。
- ・(株)富士ゼロックスと(株)慶應義塾大学出版会をスポンサーとする。
- ・テーマを設定する。2012年度は「変／不変」。
- ・社会部門と文化部門の2部門、それぞれに最優秀賞と優秀賞を設けた。
- ・最優秀賞賞金20万円。優秀賞5万円。



- ・事前エントリーした学生のみが応募可能で、参加者にはメールマガジンなどで論文執筆についての情報が提供された。また、審査終了後、参加学生にアンケートを実施。
- ・7月と10月に「論文の書き方セミナー」を実施。

主な日程

- 6月20日 学生論文コンテスト開催概要の発表
- 7月5日 第1回論文の書き方セミナー開催(講師 泉忠司)
- 8月10日 事前登録受付締切 192名登録
- 10月12日 第2回論文の書き方セミナー開催(講師 山内志朗)
- 11月30日 論文提出締切 26名提出
- 1月16日 受賞論文決定
- 2月5日 表彰式および懇親会開催

受賞者

最優秀賞：該当者なし

優秀賞

- 社会部門：法学部2年 青木みな実
「聞こえないこととろう文化」
- 文化部門：文学部1年 安部 農
「名と文学」
- 文学部2年 小川将也
「三善晃の音楽語法」

経過および今後の課題

告知当初は広報戦略が功を奏し、7月5日の第1回論文セミナー参加者110名(ビデオ受講者を含む)、事前登録192名と、比較的多くの学生を巻き込む形で始まった。その後、夏休み期間にはメールマガジンを送付することで興味の持続を狙ったが、実際の読者数は芳しいものではなかったようで、それが秋の論文提出者数(26名)に反映する形となった。とはいえ、秋の論文セミナーには48名の参加者(ビデオ受講者含む)があり、そのうち32名が、論文コンテストに事前登録していない学生であったことを鑑みると、コンテストの参加・不参加にかかわらず、論文やレポート執筆に関心を持っている学生層が潜在していることが明らかになった。

審査委員会は第一次・第二次審査を行って受賞者を決定した。結果的に最優秀賞該当者なしとなったのは、賞金に値するレベルの論文あるいは大きな将

来性を感じさせる書き手が見られないという審査委員全員の見解によるもので、1、2年生を対象とした論文コンテストにおいて、どのようなレベルを想定すべきか、果たして論者の将来性を評価すべきか、学術的妥当性を評価すべきかが議題となった。

表彰式と懇親会ではスポンサーの出席が学生にとって大きな励みとなった。

今回、論文提出者が予想を下回る数となったため、2013年度以降の継続が問われたが、試験的に3年間継続することになった。その際、事前エントリー制度や賞金額などを見直しが課題となるだろう。



縄文の旅：上野集合写真

2 はじめてのアカデミック・スキルズ

教養研究センター設立10年を機会に、センター設置授業「アカデミック・スキルズ」のミニ講義を映像化し、YouTubeに公開した。企画のきっかけは、大学からの映像発信で気軽に見られる初心者向けの学習コンテンツが少ないことだった。10分以内で、大学での学びの基本をコンパクトにまとめたシリーズがあれば、塾内外で需要を満たすのではないかと考えた。また「アカスキ」の基本講義内容をアーカイブ化することで、「アカスキ」的知の技法が可視化できるとともに、センターの看板授業が内容的にも講師陣を見てもいかに充実した授業であるか、「顔の見える」かたちで、内外に広く広報できると期待できた。当初は、iTunesUでの公開を視野に入れて企画されたが、塾内でiTunesU利用の取り決めが簡素化されていないことから、YouTube上での公開を目的にした。

映像シリーズ作成にあたっては、作業を極力簡素化することによって、これから先も同様の映像発信が簡単にできるようなノウハウ作りを心がけた。まずは、論文テーマの絞り方、ノートテイキング、クリティカル・リーディング、論文の構成、文献探索、引用の仕方、参考文献、など、「アカスキ」必修の小テーマを10程度設定し、アカスキ担当経験のある現職教員および図書館スタッフに協力を依頼し、担当テーマを決定した。その上で、それぞれの担当教員に10分以内のミニ講義原稿準備およびスライド資料の作成を依頼した。撮影映像は編集しないので、必ず原稿を10分以内に収めてもらうことを重ねてお願いした。その一方、撮影担当のDMC松澤氏にシンプルかつシャープな画面構成を提案いただき、ハイセンスな画面が実現した。

撮影は、協力者立ち会いの下、春学期5本、秋学期5本、それぞれ2～3日の間にまとめて行った。ひとりあたり約1時間の撮影時間で、出演者はプロンプターに表示される自分の原稿を読み上げた。この撮影映像にスライドを合成して、タイトルおよびクレジット画面を添えて講義映像を完成させる。協力者および出演者による映像チェックを経た後、YouTube上で公開された。

教養研究センターウェブサイトからのリンクおよびラインアップは以下の通り(順不同、敬称略)

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies>

- ・「論文とは何か」佐藤元状 (法学部)
- ・「論文作成のプロセス」迫桂 (経済学部)
- ・「情報や資料の種類とその利用方法について」浅尾千夏子 (メディアセンター)
- ・「文章表現の技法」識名章喜 (商学部)
- ・「剽窃について」赤江雄一 (文学部)
- ・「講義ノートの取り方」佐藤望 (商学部)
- ・「ブレインストーミングの技法」坂倉杏介 (グローバルセキュリティ研究所)
- ・「プレゼンテーション」新井和広 (商学部)
- ・「クリティカル・リーディングのやり方」片山杜秀 (法学部)
- ・「クリティカル・シンキング」横山千晶 (法学部)
- ・「テーマの発見と設定」不破有理 (経済学部)
- ・「フリーライティングの効用」吉田恭子 (文学部)
- ・「資料と向き合う」津田真弓 (経済学部)
- ・「情報検索の基本とデータベース」柴田由紀子 (メディアセンター)
- ・「KOSMOS の使い方」杉真梨子 (メディアセンター)

今後は塾内外への広報のみならず、様々な学習場面においてミニ講義を学生に活用してもらえる環境作りの構築が望まれる。

謝辞

「はじめてのアカデミック・スキルズ」制作にあたり、事務担当の日水氏、撮影を担当していただいた慶應デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター (DMC) の高野氏、松澤氏、撮影協力者の佐藤元状氏と赤江氏、徳永氏、出演いただいた先生方、司書の方々にあらためて感謝したい。

(吉田恭子)



はじめてのアカデミック・スキルズ
— 10分講義シリーズ —



「情報や資料の種類とその利用方法について」
浅尾 千夏子 (日吉メディアセンター)



「文章表現の技法—推敲の重要性について—」
識名 章喜 (商学部)

極東証券寄附講座関連の書籍、教養研究センター選書については、慶應義塾大学出版会ウェブページで書誌情報閲覧および購入が可能である。それ以外の教養研究センターの刊行物は学生相談室関連のものをのぞいては、すべて当センターのウェブページで閲覧が可能なので、センター活動に興味のある方々に塾内外で周知をしていただきたい。

1. 慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業報告書 2012 年 11 月 26 日発行

文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」に採択された慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業（以下教育 GP）が 2011 年度最終年を迎えた。その総括としての報告書。なお、教育 GP ウェブページ、教養研究センター刊行物紹介のページ、慶應義塾大学出版会ウェブページにおいても活動の軌跡が閲覧可能である。

2. Newsletter（ニューズレター）

主に日吉所属の教職員とセンター所員への広報が目的の Newsletter は、年 2 回発行している。

■ 20 号 2012 年 5 月 15 日発行

「教育 GP を振り返って」と題して、アート、フィールド・アクティビティ、コミュニティ、コミュニケーション、発信・評価・システムデザインの 5 セクションの方々が総括をおこなっている。さらに、教養研究センター開所 10 周年記念として、歴代所長のメッセージが掲載されている。

■ 21 号 2012 年 11 月 30 日発行

「学びの連携」プロジェクトの一環として、ケース・メソッド用いた教育方法の実践に関する特集が組まれている。SFC の先生方によるケース・メソッドに関する 2 回にわたる公開セミナーを受けて、実際に日吉の教育現場において大出敦（文学のテキスト解析）、不破有理（文学作品解釈）が実験授業を展開し、その詳細が掲載されている。

3. CLA アーカイブズおよび教養研究センター Report

2012 年度は、2 つの CLA アーカイブズ報告書と 1 つの Report が刊行された。いずれも教員サポートに関するものである。

■ アーカイブズ 27 「教員サポート 11 ソーシャル

メディアの現状と活用——大学の価値を高める情報とは——」 2012 年 9 月 10 日発行

■ アーカイブズ 28 「教員サポート 大学における発達障害を抱える学生へのサポート」 2013 年 3 月 29 日発行

■ Report 教員サポート 12 「keiomobile2 を知ろう、使おう」 2012 年 8 月 31 日発行

4. 報告書

■ 「教養研究センター 2011 年活動報告書」 2012 年 8 月 20 日発行

■ 「庄内セミナー 2012 年」(2012 年度未来先導資金公募プログラム) 2012 年 11 月 15 日発行

2008 年度に行われた「鶴岡セミナー」を原点とする庄内セミナーは、2012 年度で節目の 5 年目を迎える。今年のテーマは、「庄内に学ぶ生命——今敢えて生と死を考える」。詳細は、29 ページを参照していただきたい。

5. 極東証券寄附講座関連

■ 「アカデミック・スキルズ学生論文集」 2013 年 3 月 31 日発行

2005 年度より毎年発行されている「アカデミック・スキルズ学生論文集」は、センターが活動の中心に置く少人数制授業「アカデミック・スキルズ」で提出された論文を学生自らが編集して発行したもの。

■ 「生命の教養学」

2012 年度のテーマは、「成長」であった。詳細は、23 ページを参照していただきたい。

■ 「エディティング・スキルズ」

2010 年にスタートしたエディティング・スキルズのメンバーによる刊行物第三弾。詳細は、25 ページを参照。

6. 教養研究センター選書

教養研究センター選書は、2012 年度、新たに 1 冊が加わり、通算 13 冊となった。

■ 岡原正幸著 「感情資本主義に生まれて」 2013 年 3 月 29 日発行

1960 年代に登場した「感情社会学」とはどのようなものかを紹介し、昨今、注目を集めている「感情労働」などをキーワードに現代社会の問題を論じ、それを打ち破るための著者自身の実践を紹介する。

(篠原俊吾)

2012年度教養研究センター 刊行物一覧



Newsletter20号
(2012.5.15 発行)



Newsletter21号
(2012.11.30 発行)



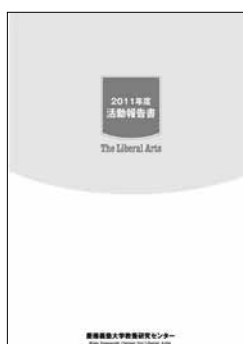
CLA アーカイブズ 27
(2012.9.10 発行)



CLA アーカイブズ 28
(2013.3.29 発行)



教養研究センター Report No.19
(2012.8.31 発行)



2011年度活動報告書
(2012.8.20 発行)



2012年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
(2013.3.31 発行)



教養研究センター選書 13
『感情資本主義に生まれて』
—感情と身体の新たな地平を模索する—
(2012.3.31 発行)

1 カリキュラム研究

教養研究センターの基盤研究においては、これまで慶應義塾大学で実施されているカリキュラムについて、日吉での教育を中心にしながら、さまざまな観点から検討してきた。2010年度以降、本研究の成果をひとつの契機にして2008年度に設置された「学部共通カリキュラム委員会」および「日吉カリキュラム検討委員会」が、本格的な活動を始めたことを受け、慶應義塾における教育に関するさまざまなデータの提供等で今後の日吉のカリキュラムの充実を側面支援できるような活動に重点をおいてきた。

昨年度2010年度にはカリキュラムについての教員の意識を知るためのアンケート調査を実施したが、それを受けて、2011年度はその集計作業と、分析、そのデータを提示したシンポジウムの開催、報告書の作成を主な活動とした。

2012年度は、「セメスター制度の研究——『秋学期入学問題』を見据えてというテーマを掲げて、活動に取り組んだ。背景には、東京大学が5年後に秋学期への全面移行を目指して検討に入り、RU12大学（旧帝大、東工、筑波、早慶、一橋）「教育改革推進懇話会」の設置を呼びかけたことがある。慶應義塾でも、「学事日程見直しに関する懇談会」、および各学部で検討が開始された。

慶應義塾大学7学部の新入生を受け入れ、カリキュラムの大きな部分が共通化されている日吉キャンパスでは、この問題のインパクトは非常に大きい。そこで、各学部での動き、外部での動きについて、誰もが参加できる研究会において、情報交換し議論する場を設ける意味で、このテーマでの研究会を立ち上げた。また、2003年以来、各学部のカリキュラム比較、半期制・通年半期制移行後の学期制をめぐる諸問題を総合的に検討し、かつ海外の大学動向等の調査を重ねてきて、この問題に関する研究の蓄積を持っているので、この知見を活かした提言も視野に入れた。学部間利害を超えた自由な論議ができる場を提供すること、内外の大学教育、塾内の諸制度、歴史的背景等についての広いパースペクティブから論議する場所を提供することを目指した。

研究会の活動は以下の通り。

2012年5月～	秋入学に関する報道資料、論文などの集積調査
6月28日	研究会開催
10月30日	東京大学 久保文明先生講演会「東京大学の秋季入学構想をめぐって」開催

12月21日～	「学事日程見直しに関する懇談会」の報告書素案が発表され、それについての意見集約、対案検討
2013年1月10日	研究会開催「フレックス学期制度（トリメスター制度）」の提案
3月8日	国際基督教大学 日比谷順子先生講演会「国際基督教大学（ICU）の3学期制とカリキュラム」
3月22日	北海道大学学務担当副学長 新田孝之先生訪問ヒアリング

10月の久保文明氏の講演会では、東京大学における秋学期検討の背景について詳しく聞くことができた。これによって、塾内における秋学期問題に関する議論に一定の寄与をすることができた。

10月時点で、東京大学における秋入学を焦点としていた論議が、学期制度の変更という焦点に移っていった。12月時点で、塾内の「学事日程見直しに関する懇談会」の報告書素案として提示された導入学期+7学期を基調とする学事日程案が提示されたが、これについてはこれまでの日吉での教育が縮小されるなどの問題があり、反発が強かった。そこで、これまでの基盤研究の蓄積を生かして「フレックス学期制度（トリメスター制度）」を骨子とする学期制度案を提示し、提案した。

この制度は、①4月からの10週間を春学期、9月からの10週間を秋学期、11月下旬からの10週間を冬学期とし、年3学期制にする。②現行の科目を、1学期週2コマ科目と、1学期週1コマ科目に再配分する。③6～8月および3月に、それぞれ夏季・春季集中プログラム学期を置き、さまざまなプログラムを展開する案である。

本案は1月30日、日吉主任会議でプレゼンテーションを行い、塾内各所で公表をした。「学事日程見直しに関する懇談会」でも取り上げられ、最終的には同懇談会の最終報告書の中で、2013年度1年をかけて検討するべき5案のうちの1案として取り上げられることになった。

この案は年3学期制とした案であるので、戦後間もなくから3学期制をとって国際的なカリキュラムを展開する国際基督教大学（ICU）の学長で、慶應義塾の出身者でもある日比谷順子氏にICUのカリキュラムについての講演会を依頼し、その講演記録をCLAアーカイブの一部として出版した。

2012年度メンバーは以下の通り。佐藤望（座長・商学部・音楽）、高山博（文学部・文化人類学）、羽

田功（経済学部・ドイツ語）、井奥洪二（経済学部・化学）、木保章（法学部・フランス語）、小林宏充（法学部・物理学）、木島伸彦（商学部・心理学）、鈴木伸一（医学部・ドイツ語）、金田一真澄（理工学部・ロシア語）、不破有理（所長・経済学部・英語）、種村和史（副所長・商学部・中国語）、大出敦（副所長・法学部・フランス語）、吉田恭子（副所長・文学部・英語 ～ 2012.9）、篠原俊吾（副所長・法学部・英語 2012.10 ～）

（佐藤 望）



日比谷潤子氏



講演会の様子

教養研究センター2012年度基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画

講演会

国際基督教大学（ICU）の
3学期制とカリキュラム

講演： 日比谷 潤子 氏

国際基督教大学（ICU）学長

2013年3月8日（金）16:30～
日吉キャンパス 来往舎 大会議室
学内の方はどなたでもご参加ください

東京大学による「秋入学構想」をきっかけに、義塾でも学期制の問題が議論されています。教養研究センター2012年度基盤研究「セメスター制度の研究 ―「秋学期入学問題」を契機として」は、3学期制を骨子とする学事日程案を提示しました。今回は、3学期制を取り、国際化では一歩進んだカリキュラムを展開するICUの日比谷学長に、ICUの取り組みについて、お伺いします。日比谷氏は、かつて慶應義塾大学国際センターの教員であられ、慶應の事情もよくご存じで、慶應へのメッセージとご意見をいただけることと期待しております。

日比谷 潤子 氏
国際基督教大学（ICU）教授。2012年より学長。専門は言語学・音韻論で、ペンシルベニア大学で博士の学位を取得。慶應義塾大学国際センター助教授を経て、ICUへ。主筆に『多言語社会の外国人学習支援』（慶應義塾大学出版会）。『はじめて学ぶ社会言語学 ことばのバリエーションを考える14章』（ミネルヴァ書房）など、多数の論文がある。

講演会ポスター

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム 11

基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画
国際基督教大学（ICU）の3学期制とカリキュラム

The Liberal Arts

X

慶應義塾大学教養研究センター
Yoko Research Center for Liberal Arts

講演会報告書

2 学びの連携プロジェクト

慶應義塾の各キャンパスでは、様々な教育メソッドが開発され実践されている。その特徴は何か？

それらのメソッドによって、なぜ学生は生き生きと主体的に授業に参加できるのか？そして、そうしたメソッドを日吉の教養教育の実践に取り入れることができないだろうか？そのような問題意識から、「学びの連携」プロジェクトが立ち上がった。

6月23日(土)に開催された「ケースメソッドの効果的運用の試案」では、飯盛義徳(総合政策学部准教授)と西田みづ恵(大学院政メ研究科特任助教)を講師に迎え、ケースメソッドを用いた地域活性化や小中高生の主体的学びの育成の試みが紹介された。9月29日(土)に開催された、「ポストデザイン・ポストシステムの方法論によるイノベーションの新たな地平開拓」では、保井俊之(SDM 特別招聘教授)を講師に迎え、SDMにおいて展開されている、デザイン思考とシステム思考とのハイブリッドな方法論である WISDM が紹介された。

さらに、この二つの先進的な教育メソッドの文学の授業への応用可能性を探るため、実験授業も開催された。8月6～8日には、大出敦副所長による「ケースメソッドを用いたクリティカル・リーディングの試み」が、11月3日には、不破有理所長による「文学でシステム？アルフレッド・テニソンの詩『シャロットの女』をシステムで分析、みんなで創作するワークショップ」の二つの実験授業が行われた。

慶應義塾の各キャンパスでは、メディアセンターを拠点として、学生同士の教え合い・学び合いの場が作られている。日吉の学習相談アワー、矢上のS-Circle、SFCのWRC(Writing & Research Consultant)がそれであり、各キャンパスの特性に合わせた多様な活動が学生の主体性に支えられて展開されている。それらを連携させることによってお互いの特徴を学びつつ、慶應義塾全体の活動に発展させることを目指して、2013年3月18日には、公開セミナー「塾生による塾生のための半学半教の場作り」が、清家篤塾長、長谷山彰常任理事の臨席を得て開催された。

キャンパスという地理的枠組み、学部という学問分野の枠組みをも超えた「学びの連携」を構築することによって、総合大学たる慶應義塾の教育研究活動に新たな発展の息吹を吹き込みたい。

(種村和史)

1 ケースメソッド

2011年度の学びの連携プロジェクトで行われた飯盛義徳(総合政策学部准教授)、西田みづ恵(大学院政メ研究科特任助教)によるケース・メソッドのワークショップを受けて、教養研究センターでケース・メソッドの実験授業を行うことになったのは同年の年度末のことだった。ケース・メソッドという人文科学の分野ではあまり聞き慣れない教授法は、ロー・スクールやビジネス・スクールなどの実務型の大学院、教員養成学部や医・薬学部などで広く取り入れられているものである。ケース・メソッドは現場で、数ある選択肢の中から一つを選択する際に働く意志決定能力を育成する討議型の授業なので、上記のような分野では確かに有効であったが、今回、実験授業として考えたのは文学解釈の教授法に転用できないかというものであった。では文学解釈で意志の決定とは何かと考えたとき、さまざまな読解の可能性があるなかで、ある一つの読解を選択するということが意志の決定にあたると考え、それに基づいてケースを作成した。原則としてレポートや発表を行ったが失敗したという学生の身近で起こることを題材にし、その意志決定の何が間違っただけに評価につながらなかったのか、どのような読解を行えば評価につながるのかを討議させるものにした。

実験授業は2012年8月6日から8日までの3日間にわたって行った。テキストは谷崎潤一郎『吉野葛』、泉鏡花『高野聖』、ポール・クロードルの外交書簡をテキストに用いた。参加した学生には予め、テキストとケースを読み込み、意見をまとめておくことを伝え、当日はまず3、4名の小グループに分かれて2時間程度の議論を行い、昼食をはさんで全体での討議をやはり2時間ほど重ねるという形で授業を展開した。

全体としては、文学作品の読解の失敗例があることが議論への導入となり、議論を活性化させることが可能であることが浮き彫りになったが、一方で、ケースを作成と授業の準備がこの授業を展開する上で非常に重要であることも分かった。

(大出 敦)

2 システム・デザイン手法で文学。 ひょうたんから駒

教育 GP 以来取り組んでいるアルフレッド・テニソンの詩“Lady of Shalott”を題材にしたワークショップ手法を用いる文学授業の試みを、今回はシステムデザイン・マネジメント (SDM) 研究科の保井俊之特別招聘教授のご協力を得て開催した。文学を読み解く作業とは、テキストに向き合い、テキストから見える疑問に対して自分なりの読み(=解決)を示していくことであろう。この読むという個人の行為を教室という共同の空間において、どのように共有できるのか、共有することによって、個人の読みを超える新しい読みの創造が可能なのか、この目的を追求するために、まったく分野の異なるシステム・デザイン手法が生きていくのではないかとの目論見のもと、本ワークショップを企画した。当初は、文学という伝統的な科目を教える意義の復権をめざしたいという気持ちから始めた試みであったが、そのためには必然的に科目の受講者、つまり学生の関心と覚醒を喚起するような授業を考えることが必須となる。これはひいては、学生の主体的な取り組みを誘導し、学生自身の学びへの喜びを開花させることにもつながるであろう。つまり、授業を面白くするという目的と新しい読みを生み出したいという批評解読的な目的と新しい読みにつながる新しいアーサー王物語を生み出したいという創造的な目的という、たいへん欲張りな目的を胸に秘めて取り組んだ。そして、これらの目的を達成するためにシステム・デザインというハイブリッドな手法が面白い触媒となってくれるかもしれないという直感にもとづき「暴走」が始まった。

果たして、11月3日のワークショップの当日。保井氏の笑顔となめらかなトーク、そしてテーブルにはお菓子と飲み物、バックグラウンドには音楽と、参加者が自然に溶け込める雰囲気を作る。これは自由な発想を出し合うための序幕である。SDMの手法とワークショップのルールを説明してくださった保井氏の後を継ぎ、不破が事前課題を確認、さっそくチームごとにシャロットの詩のPartごとにヘッドラインをつけ、各パートが物語展開にどのように関わっているのかを俯瞰的視点から確認してもらい、作品の物語の転換点を考える話合いを始める。これは、システム思考の「つながりを見つけ出す力」を用

いて、SDMのモットーである「木を見て森も見る」という細部と全体の俯瞰という物事の観察と分析を行う学びに姿勢を援用しようという目論見である。しかしながら、すでにチームごとの盛り上がりを見せていたワークショップは、時間の制約と、事前課題の消化具合、シャロットの詩を読みこなしている人と初めて読むという人との間で理解の差異などの要因から、一挙に創作ワークショップへと突入する。暴走が止まらない。システム・デザインの手法のひとつ、シナリオグラフという強制発想法による創作の実践へと進む。各チームはブレインストーミングによって書き出したアイデアをつなげ、いつ、どこで、どういう状態の、だれが、どうするという流れで物語を作っていく。舞台を宇宙空間へ飛翔させたチームが2つ、神話的語感をもつ岩戸とするチームが1つ、と思いきやシャロット姫が登場してくる。参加者も主催者も完全に楽しんでしまう展開である。時間制限がある中で、個人の読みとチームの読みをKJ法のように整理をしてゆき、シナリオグラフを用いて、一つの物語につむぎ、創作、演じる。なかでもチーム名「East Meets West」は身体を用いた創作によって、朗読という声と、朗読者の周りをチームが舞うという身体の動きを組み合わせ、不思議なシャロットを出現させた。最後に、能の発声法で男子学生が、ランスロットの最後の言葉を詠じると、見事にテニソンの詩は能のことばに化身し、西洋と東洋の出会いとの合一が成し遂げられた。3時間のワークショップが瞬く間に過ぎた。

参加者の一人からは、ポスターではイメージしにくかったSDMの手法が、ワークショップを通じて体感でき、かつ今回のテーマである「シャロットの女」にも重なったという声が寄せられた。保井氏が説明した発想量を増やし高めていくためにはポジティブな評価が必須というワークショップのルールをチーム作業の中で守り実践してみたところ、人と人の潜在意識がいつの間にか繋がったという実感を得たという。しかもそのチームの作業の中で、メンバーの一人の変容が「シャロットの女」の閉ざされた塔から外界への移行という主題にも対応することに気づき、偶然名づけたチーム名「西洋と東洋の出会い」に主題と表現法の上でも合致することになった。不思議な、予期しない成果だった。

参加者のアンケートによれば、参加動機のひとつは「手法への関心」や「参加型、討論形式の教育方法

への関心」という今回の文学と異分野手法の組み合わせへの関心や主体的に物事に取り組む学生を育てるための教育手法への関心が高いことが見てとれる。そのような参加者にも刺激的なワークショップとなった。今後、この手法をさらに深めることによって、教育法としての可能性を追求したい。

以下は、アンケートの「参加動機」と「感想」の記述である。

Q：この公開セミナーには、どのような動機でご参加くださいましたか？

A：

- ・興味がわいたので。
- ・SDMの第1回 Kidsに参加させていただきましたが、文学とシステムデザインの融合というのに興味をもち参加した。
- ・参加・討論形式の教育方法に興味があるので。
- ・教養研究セナー主導のSDM的なワークショップを見てみたかったから。
- ・大学時代に出会ったLady of Shalottを30年近い月日を経て、今一度見つめ直してみようと思ったこと。SDMに関心があったこと。素敵な皆さまにお会いしたかったこと。
- ・activeな授業のすすめ方に興味があったので。
- ・Shalottの女についてもっと読みたかったから。
- ・SDMの手法の修得と文学のゆらぎのふしぎ、発展。
- ・テニソンのLady of Shalottがどのようになっていくのか興味があったので。
- ・読む×感じる⇒イノベーションの試みに共感を得たため。
- ・昨年のセミナーが面白かったのと、授業に新しい方法を取り込む参考にしたい。
- ・授業方法改善の参考のため。

Q：本日の公開セミナーの感想をお聞かせください。

A：

- ・新世界が見えました。
- ・いろんな方が参加されており、刺激となりました。又、Kidsの復習で忘れていた項目を思い出すこともできました。又、中世英文学（詩）にも初めて触れたので今後勉強してみようと思います。
- ・大人数で聞けばかりの授業だけではなく、このような討論形式の授業が増えるよう願います。
- ・事前にテーマが与えられている形のWSは初めてでおもしろかった。参加者の専門性の違いも感じられて良かった。
- ・文章だけではピンと来なかったSDMが、自然に実感できて、

もっと勉強したり、活用してみようという気になった。チームメンバーが素晴らしくて、他人と出会うこと、関わることから創造が始まるのだなと思った。先生方がいつもながら素晴らしい。

- ・何かを作りあげた、創造した感じがした。何でもいいから遠慮なく意見を言う、言い当てる、というところから始まり、皆で協力して一応まとまりのあるものを作り上げるというすごいことをしたいと思う。
- ・せっかく宿題があったので、group活動は楽しかった。ただもっと語りあう時間があればよかった。結局最後のランスロットの言葉の意味はよくわからないままだった。ただ文学に出会うよいきっかけになると思う。
- ・すばらしかった！！
- ・協同で「暴走する」楽しさを味わわせていただきました。一人ではとても生まれない発想でした。保井先生、不破先生のお話がまたわくわくとしたもので楽しかった。BGMも良かったです。こういうワークショップがあると発想もまた広がります。
- ・是非とも続けてほしい企画だと思う。
- ・アイディアの出し方を知る良い方法を教えていただいた。実践も面白かった。普段全く関わりのない人との作業も楽しかった。参加者が意欲をもっているお陰ですね。
- ・何らか社会的枠組み（所属）が共通でない人との協働作業で楽しかった。

（不破有理）



創作ワークショップ「岩戸」班の発表



ワークショップ終了後の一幕

1-1 アカデミック・スキルズ

アカデミック・スキルズは大学時代に身につけておくべき基礎体力としての論理力、調査力、説得力を養うものとして2005年度より設置されている科目である。2012年度は、基礎編「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3クラス、同「アカデミック・スキルズ(英語)Ⅰ・Ⅱ」1クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅰ、秋学期Ⅱ)、中級編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」3クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅲ、秋学期Ⅳ)の合計7クラスが開講された。

「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」は1年間をかけて論文・レポートの書き方とプレゼンテーションの基礎を学ぶ講座である。春学期は主題の立て方、資料検索の仕方、書式、論の構築といった論文・レポートの基礎を学び、4000字のレポートで評価を行う。一方、秋学期は春学期の成果を踏まえ、自分でテーマを決め、論文制作に取りかかると同時に、パソコンでスライドショーのアプリケーションを使用することを原則としたプレゼンテーションの基礎を学ぶことになる。秋学期は最終的なプレゼンテーションと8000字の論文によって評価されることになる。以上が原則であるが、基本を押さえておけば各クラスで自由に授業を構成できるようになっているので、各クラスで個性的な授業が展開されている。

水曜5時限クラス(担当:古賀裕章、原大地、岸みづき、履修者:24名)は「日本」というテーマで上記の授業構成に近い形で展開された。木曜5時限クラス(担当:片山杜秀、種村和史、識名章喜、履修者:22名)は、春学期はディベートを2回行い、秋学期は学生個々人の論文作成に力を注いだ。金曜5時限クラス(担当:新井和広、佐藤望、坂倉杏介、履修者:24名)も木曜5時限クラス同様、春学期はディベートを行い、秋学期は学生個々人の論文作成となった。また2012年度で2年目となった火曜2時限の「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ(英語)」(担当:迫桂、奥田暁代、ファロン、ルース、履修者:13名)は、日本語で論文を作り、プレゼンテーションを行う「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」と授業の基本は同じであるが、原則として教室内は英語しか使用せず、最終的な成果物も英語による論文、英語によるプレゼンテーションである点が特徴である。

「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」は、「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」をさらに発展させたい学生を対象にしているため、原則として、Ⅰ・Ⅱを履修した学生のみを対象としているが、実際には意欲ある

学生を受け入れ、授業展開している。「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」では、共通の基本的な申し合わせはなく、クラス毎に特化した授業が行われている。火曜5時限クラスの「実地調査の手法」(担当:長田進、鈴木亮子、井本由紀、西山敏樹、履修者:2名)は、近年の学生がアンケート、フィールドワークなどの教室外での社会調査が増えたことを受けて開設したもので、講義と実習から調査法を獲得していくものである。水曜5時限クラスの「批評と創作」(担当:佐藤元状、横山千晶、坂倉杏介、履修者:6名)は、文学テキストを読み込み、解釈し、それを映像化するというユニークな試みを展開した。木曜5時限の「読書から批評へ」(担当:大出敦、岩下綾、履修者:2名)では、教養研究センターの実験授業としても展開したケース・メソッドを用いて文学作品のテキスト読解を試みた。附言すると、2013年度からは「批評と創作」は「身体知・映像」という科目名で新たに出発し、「実地調査の手法」と「読書から批評」は開講せず、この2クラスの成果は「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」に取り入れることになった。

2013年2月6日には、極東証券会長の菊池廣之氏を招いて恒例になったプレゼンテーション・コンペティションを開催、各クラスの優秀者がその成果を競い合った。この日、審査が行われている間に、水曜5時限クラス「批評と創作」の成果である映画が上映され、こちらも好評を博した。一方、この日に先立って各クラスの優秀論文のなかから、最優秀論文を選出する論文コンテストも行われたが、その結果もこの日発表された。このプレゼンテーション・コンペティション及び2012年度末に刊行した『アカデミック・スキルズ学生論文集』は、それぞれ各クラスの学生から成る実行委員、編集委員が自主的に運営・編集したものである。

最後に付け加えておくべきことは、2012年度は教科書である『アカデミック・スキルズ』(佐藤望編著、慶應義塾大学出版会)の改訂版が出版され、これまでのアカデミック・スキルズでの活動の成果が新たに盛り込まれたものとなった点である。

(大出 敦)

1-2 身体知：創造的コミュニケーションと言語力

2005 年度に発足した「身体知」プロジェクトの成果の 1 つに、文科省大学教育推進プログラム（教育 GP）「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の採択（2009 年－2011 年）があり、同プログラムの一環として、2010 年度に正規授業「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」が始まった。参加型・体験型の授業を通して、知力と身体感覚を相互的に磨き、言語力と非言語的コミュニケーション力の双方を育てるとともに、創造性を高めることを目的とする授業である。

2010 年度、2011 年度に引き続き、2012 年度も、同科目は、武藤浩史（法学部）、横山千晶（法学部）を担当講師とし、8 月 11 日から 16 日まで、6 日間の夏期集中型授業（2 単位、初日から 5 日目までは第 3 時限と第 4 時限、最終日は第 3 時限から第 6 時限）の形態を取って、開講された。また、通学生だけでなく夏期スクーリングに参加中の通信教育課程学生にも講座を開き、両者が交流しつつ学べるように設定した。履修者数は、通学生が 9 名、通信生が 10 名となり、年齢も人生経験も大いに異なる多彩なバックグラウンドを持つ学生たちの交流の場となった。



ビートルズの音楽に抗して三味線を弾く男子学生

2012 年度のテーマは 20 世紀最大の文化現象となったビートルズである。彼らの広範な活動を概観し、精査し、追体験することで彼らの活動の意義を探究するとともに、その歌詞を精読し議論することで言語批評力を鍛え、その後、身体感覚と感性を磨き言語力とコミュニケーション力と創造力を育む様々なワークショップを行い履修者の心身を解放してから、創作活動にチャレンジさせ、最終日には創作成果発表会を開催した。テキストは内田久美子訳『ビートルズ全詩集』を用いた。時間割は次のとおりである。

- 【1 日目】第 3 時限：イントロダクション 第 4 時限：講義（初期ビートルズ）
- 【2 日目】第 3 時限：講義と議論（後期ビートルズ） 第 4 時限：歌詞読解と議論 1
- 【3 日目】第 3 時限：歌詞読解と議論 2 第 4 時限：身体ワークショップ（息をする、食べる、歩く）
- 【4 日目】第 3 時限：読解と創作 第 4 時限：創作身体ワークショップ（イエロウサブマリン体操、ヘルプ・ウォーク）
- 【5 日目】第 3 時限：創作準備 1 第 4 時限：創作準備 2
- 【6 日目】第 3 時限：創作発表 1 第 4 時限：創作発表 2 第 5 時限：創作発表 3 第 6 時限：創作発表 4

履修学生は、6 日間の前半で蓄えた知識と精読力・批評力、3 日目と 4 日目で鍛えた身体的感性を活用して、それぞれが、5 日目と 6 日目の創作活動において、その潜在力をいかんなく発揮した。ビートルズの和風編曲や 1 人のストーリーテリングからグループ創作に至るまで多彩な作品がそろい、各自の創作作品発表後に議論をすることで批評力をも鍛えた。「毎朝、起きるのが楽しみなほど、刺激的な授業」など多くの肯定的なコメントをいただいた。通学生と通信生の交流に関しても肯定的な評価を得た。次年度は、この授業の教科書用に著書（『ビートルズは音楽を超える』平凡社）を上梓し、さらなる改良を加えたい。



女性三人の踊り

（武藤浩史）

1-3 生命の教養学

この科目は2010年度と翌2011年度の2年にわたり、理系と文系をそれぞれ代表するゲスト講師（つまり計2名）による学問的対話（土曜日集中講義）という形で編まれた。内容的には相当の充実を見たということだが、残念ながら授業運営という点からは履修者減少等の問題が生じたようである。

鈴木晃仁企画委員長(当時)の後任を拝命することになった私はその反省の申し送りを承け、それ以前のスタイル——つまり通常の曜日・時限に週替わりでゲスト講師をお招きするオムニバス講義という形式——をあらためて採用することを、コーディネーター一同(私を入れて9名、本報告書末尾の「組織構成員」に記載あり)で相談のうえ決めた。

だが、スタイルの変更にもかかわらず科目の本質にはいささかの变化もない。その本質を大ざっぱにまとめれば次のようになるだろう。1)科目名にある「生命」をあらゆる学問分野によってアプローチ可能なだけ広い意味をもつ概念として捉えること。2)年度ごとに、その広い意味での「生命」現象にとって本質的と思えるサブテーマを設定すること。3)そのサブテーマをめぐって人文科学、社会科学、自然科学等をそれぞれに代表する研究者にお話しいただくこと。4)そのお話を承けて、受講する学生に「教養」的視座から「生命」について再考してもらうこと。

(「教養」的とはここでは、特定の学問分野におもねることなく思考の材料を広く求め、とはいえ各分野の厳密さによって得られた成果には充分な敬意を払い、そのようにして得られた雑多な材料のすべてをもとに新たな知の組織を自分で工夫する、というほどの意味である)。

集中講義からオムニバス講義に変更することで、議論の濃密さは避けがたく失われる。しかし、そもそも私たちが科目を開講しているのは、高等教育に参与しはじめて間もない1、2年生が利用者の大半を占める日吉キャンパスである。「深く、狭く」よりも「広く、浅く」多くの議論に出会うことができるということのほうが、そこで学ぶ人々にとっては恵みになるかもしれない。

ただし、オムニバス講義であるだけで成功が約束されるわけではない。サブテーマの選定こそが重要である。コーディネーター一同で案を出しあって検討した結果、2012年度は「成長」をサブテーマとすることになった。

「成長」は狭い意味での生命現象における最重要概

念の1つである。さらに、広い意味での「生命」(生活、人生、生きること一般、また生命に擬して語られるもののすべてを含む)においてもほぼつねに成長の類比物が観察され、しかもそれは当の「生命」にとってほぼ例外なく本質的な役割を果たしている。1度は正面から取りあげられるべき主題であることは明らかである。

サブテーマが決まったところで、次はご登壇者への依頼である。幸い、教員7名のコーディネーターの専門や関心はさまざまである。お話を伺ってみたい講師のかたをそれぞれに挙げたうえで、学問分野に極度の偏りが生じないようにはからって11名のかたへの依頼までたどりついた。

講師を快くお引き受けくださったかたたちのお名前を以下、ご登壇順に挙げておく(大変失礼ながら紙幅の都合で肩書きは省略し、ご専門のみ付記する)。三中信宏氏(生物体系学)、石倉洋子氏(経営学)、村上陽一郎氏(科学史・科学哲学)、山海嘉之氏(ロボット工学)、古市憲寿氏(社会学)、松浦良充氏(教育学)、斎藤修氏(経済史)、茅根創氏(地球システム科学)、富田庸子氏(教育心理学)、近藤滋氏(生物学)、奥野景介氏(スポーツ科学)。

授業の実際は次のようにおこなわれた。2012年春季学期に開講し、冒頭1回(4月6日)はガイダンスに充てた。翌週13日から7月6日まで11回にわたり上記の講師の皆さんにそれぞれお話をいただいた(1時間程度のお話をいただき、その後30分は質疑応答とミニレポート作成に充てる)。それを承けて、翌週13日にまとめのディスカッションをおこなった。さらにその翌週19日に、それまでの授業すべてをふまえて自由に論述をしてもらう筆記試験をおこなった。

受講者は60名弱だった(受講者減少という問題は解決された)。脱落者もほぼ皆無で、各回のミニレポートや期末の筆記試験にもほとんど全員が前向きに取り組んだ。質疑応答にも多数が積極的に参加した。

なお、講義録『生命の教養学 IX 成長』も鋭意準備中であることを付記する。

(高桑和巳)

1-4 身体知：音楽

住友生命保険相互会社の助成により、今年度より同寄附講座「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」を開設した。

この科目は、音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験するために設置されたもので、本格的な音楽演奏訓練を重ね、授業履修者による公開演奏会を開き、それを社会に還元するという事業を行った。

事業の実施日程

2012年4月7日 クラス別ガイダンス 履修登録
授業開始(毎週土曜日、水曜日は合唱自主練習)

2012年7月18日 慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会にて、住友生命保険相互会社寄附講座声楽アンサンブルクラス ベンジャミン・ブリテン《5つの花のうた》他演奏

2012年9月19～20日 集中練習

2012年9月30日 秋学期授業開始

2012年11月11日 器楽クラス演奏会 古楽器で奏でるバロック時代のトリオ・ソナタ

2012年12月1～2日 合唱クラス合宿練習 (東京スポーツ文化館)

2013年1月5日 慶應義塾大学コレギウム・ムジクム 合唱団・古楽アカデミー演奏会

履修者数 合唱クラス 24名

器楽クラス 21名

演奏会来場者数 7月18日 210名

来場者アンケート回収数 52

11月11日 150名

来場者アンケート回収数 40

1月5日 390名(満席)

来場者アンケート回収数 62

事業の成果

本事業における講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスの教養教育の一環として設置されたもので、文化・歴史を、身体を通じて体得し、知識レベル、体得レベルの知を、身体に統合させるということを目的としたものである。

音楽は、歴史・文化のなかで、人間の知的活動を常に反映してきたが、本授業では17、18世紀および20世紀の、高レベルの芸術音楽を取り上げ、それらを時代に即したかたちで演奏するための訓練を行った。具体的には、器楽においては、いわゆるピ

リオド楽器(歴史的古楽器)を使用し、当時の音楽が前提としていた音響を再現する努力のなかでこれを行い、また声楽クラスにおいては、ドイツ語、フランス語、英語の発音訓練、古楽を意識した発声訓練を重ねていった。

現代人がもつ身体性と、当時の音楽が前提としていた身体性の距離を意識したなかで、音楽表現を作り上げていった。1月の演奏会の後半では、17世紀フランス王宮のオペラの一部を演出付きで上演した。

2回の演奏会は、日吉キャンパス内の本格的な音楽ホールである協生館 藤原洋記念ホールで実施した。

達成点と課題

技術的な点においては、すべての学生に飛躍的な進歩があった。学生もそれを実感したとアンケート調査で答えた。この授業の目的は、技術的な向上、演奏技術の向上というだけでなく、その先を学生に意識させることである。音楽の演奏を通じて、芸術の歴史的・文化的意味を体得すること、コミュニケーション能力、交渉力、表現力、発進力など、学生に意識させ続けることをさらに効果的に進めていく必要がある。

学生アンケート結果

・授業に対する満足度

回答者のうち 97%が満足したと回答

・技術向上に関する実感

回答者のうち 100%が技術向上を実感したと回答

・コミュニケーション力、交渉力、表現力、発信力の実感

回答者のうち 88%が実感したと回答

(佐藤 望)



成果発表演奏会(協生館 藤原洋記念ホール)

2 エディティング・スキルズ

「ほんとに本を好きになるために」というテーマで始まったエディティング・スキルズも2012年で4年度目を迎えた。「本作り」において執筆にとどまらないすべての行程——企画・取材・編集・構成・造本・流通——を体験的に学習することで、書籍・出版文化を複合的に学ぶと同時に、編集過程に不可欠な総合的言語力を習得することが本実験講座の目的である。ウェブサイトや電子書籍といった書籍以外のメディアも対象としている。

春学期はDTP (Desktop Publishing) 教室と手作り製本教室の二本立てが定着した。コンピューターを駆使した現在の編集作業を実習すると同時に、手作りの製本を通して書籍の物理的構造を学ぶことで、「本の仕組み」に親しむだけでなく書籍の可能性を模索するきっかけとする。また、昨年度からの継続企画として、日吉生協書籍部でのブックフェアが6月に開催され、新年度からエディティング・スキルズに加わった学生と昨年度からの学生が共同作業をする機会となった。

夏休みには、発達障害児教育支援のNPO、Gifter LABO が主催するイベントに手作り本の体験学習ブースとして有志学生が参加した。これはエディティング・スキルズ初の社会活動であり、昨年度の三田祭展示がきっかけとなって実現した。

秋学期には、Hiyoshi Research Portfolio 出展のため、ウェブサイトのリニューアルを行うとともに、昨年度に引き続き、学園祭(三田祭)で手作り本を展示した。

本実験講座の担当者として、総合言語力向上のためには、教室内の教員学生間に限ったやりとりだけでなく、外部や他者とのコミュニケーションが不可欠であると痛感している。そうしてはじめて出版という不特定多数を対象とする媒体の潜在力を実感するとともに批判的見地を養うことができるのだ。本実験講座は基本の講座を軸に、学生発案の企画に発展させるという比較的ゆるやかな枠組みを特徴としている。今後は教室外、大学外へ発信していく学生の企画が出てくるかどうか本講座改善の鍵になる。そのためにも、学生が複数年・複キャンパスにわたって参加できる枠組みが望ましい。

以下は2012年度の主な活動の記録である。

4月19日：受講説明会

5月30、31日：小磯勝人(慶應義塾大学出版会)による編集の基礎とDTPの講座

6月4～16日：日吉生協書籍部ブックフェア「晴耕雨読」開催

6月16、30日：豆本作家田中葉氏による製本教室

8月19日・虎ノ門「てれとプラザ」:「Gifter LABO フェスタ2012 きみのホンモノ個性をを見つけよう! 夏休みオンリーワン体験スクール」参加

11月1日：安井元規(慶應義塾大学出版会)によるウェブサイト編集講座

11月22～25日：三田祭にて手作り本展示および各種企画発表。雑誌『ばら☆ばら』配布。

12～3月：法学部設置科目「人文科学特論」(笠井担当) 受講生の詩集『椿の果汁』(3月出版)、雑誌『BARABARA』新入生歓迎号編集(2013年度初頭に配布予定)

エディティング・スキルズのウェブサイト：
editingskills.net

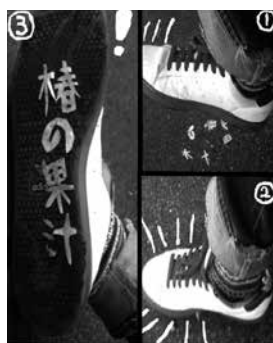
<担当者>

笠井裕之(法学部)、大出敦(法学部)、吉田恭子(文学部)、小磯勝人(慶應義塾大学出版会)、安井元規(慶應義塾大学出版会)

(吉田恭子)



田中葉氏による製本教室



『椿の果汁』

3「学び場」プロジェクト

1 学習相談アワー

教養研究センターは、2008年度からメディアセンターとの共同事業「学生の学習環境を整える」プロジェクト（略称「学び場プロジェクト」）を実施している。本プロジェクトの中心的な活動が、「学習相談アワー」である。これは、教養研究センターの開設科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生の有志が学習相談員として日吉図書館1階のレファレンスデスクに座り、レポートの書き方・文献検索の方法に関する学生からの相談に対応する取り組みである。

5年目を迎えた学習相談アワーは、春学期は5月7日～7月19日、秋学期は9月24日～1月22日（11月20日～26日の三田祭期間と12月28日～1月5日の冬季休業期間を除く）の2期にわたって行われた。原則として、月曜日から金曜日までの13:00から18:00までの時間帯である。

本年度は、相談件数の大幅な増加があった。2011年度春学期においても相談件数が増加したが、これは東日本大震災の影響で多くの科目が春学期末試験をレポートに振り替えたことによるものであると考えられた。実際、通常の体制に戻った秋学期には相談件数は例年並みに留まった。ところが、本年度は、2011年度のようなイレギュラーな要因がなかったにもかかわらず、春学期の相談件数は前年度並みの高水準となった。さらに、秋学期においてもこの傾向は保たれ春学期同様の相談件数を得ることができた。このことは、学習相談アワーが日吉の学生達に広く認知され始めていることを示している。今後もこの勢いを保ち安定的な活動を実現していきたい。

学習相談員は、大学2年生から博士課程3年生までの全学部に跨っており、互いに連絡を取り合うのは困難であるが、三田キャンパスにおいて定期的な打ち合わせを行っている。彼らの地道な熱意と積み重ねが上述のような成果になって現れたのであろう。「半学半教」の場作りが確実になされていることを実感する。

2 学習相談員自主企画

学習相談員は、日吉キャンパスの学生たちに、大学におけるより充実した学びへの欲求を喚起するために、様々な活動を自ら企画し実施している。

春学期には、学習相談員が講師になり、「レポートの書き方講座」を開催した（6月14日、6月18日）。聴衆と同じ学習上の悩みを経験してきた先輩が講師となり、フランクかつ実践的にアドバイスをすることで、教員によるものとはひと味違う講演会として、2回とも定員に達する参加者を得ることができた。

また、日吉図書館1階の展示スペースにて二種類の自主展示企画が開催された。

6月4日～7月5日には「どこがダメなの!? わたしのレポート～教えます、正しいレポート作成術とスケジューリング」が開催された。レポート作成において学生が陥りがちな失敗のパターンを分析し、問題のあるレポートの典型例を相談員自身で作成した。その上で問題の所在を指摘し、克服の方法をアドバイスした。さらに、失敗の根本的な原因として、多くの学生がスケジューリングをおろそかにしていることに鑑み、レポート課題発表から調査執筆、完成レポート提出までの作業項目・手順に基づき正しくスケジュールを組みそれに基づいた作業を行うことの重要性を説明した。

12月5日～1月16日には「学習相談員、一步抜け出す秘訣あるってよ～ノートの取り方、資料の探し方、問いの立て方のすべて」が開催された。大学1・2年から3・4年に進み、専門的な教育へとシフトするにつれ、学んだ内容を批判的に検討し総合しつつ、自分自身で問題を発見し解明する、より能動的な姿勢に転換することが求められるようになる。それに対応して、授業の聴き方、ノートの取り方も日吉時代とは自ずと異なってくる。それを企画展示として示すことにより、専門課程の学びへの意欲を喚起することを狙った。いずれの企画展示も、学生の切実な悩み・疑問に答えるもので、足を止めて展示を仔細に見る学生の姿がめだった。また、両企画とも展示内容をプリントの形で来場者に配布し、好評を得た。

学生相談員自身による講座・企画展示の内容を踏まえ、学生の視点から大学の学び・レポートの書き方をアドバイスする書籍を刊行すべく、現在執筆作業を行っている。

（種村和史）

4-1 教員サポート講演会

慶應義塾には、大学教育を取り巻く環境の変化に対応し、高度な教育研究活動をサポートするための施設および知識と経験が様々な部署、様々な人材の中に蓄積されている。しかし、情報の共有が充分でないために彼らが教員に十分に生かされていないのが現状である。このような状況に鑑み、教養研究センターでは、「教員サポート」を開催し、研究教育に資する様々な知識とスキルを紹介している。本年度は教員サポートワークショップとして以下の2つが開催された。

■メディア・リテラシーワークショップ「keiomobile2を知ろう、使おう」

日時：2012年6月27日(水) 18:15～19:45

講師：山根健氏(日吉 ITC)

2012年度より日吉キャンパスでも、慶應義塾における無線LAN環境 keiomobile2 が本運用になった。しかし、KEIOMOBILE と keiomobile2 との違い、接続のための設定がうまくできない、昨年度は問題なく使っていたのだが、年度が変わったら使えなくなった、などの疑問や悩みを多く耳にする。そのような声に応え、keiomobile2 をより多くの人々に快適に使ってもらう援助をするために、日吉 ITC との共催企画として開催された。

日吉 ITC の山根健氏より keiomobile2 の概要と接続方法の説明がなされた。当日は複数の日吉 ITC 職員が来場し、セミナー参加者のパソコン・タブレット・スマートフォンなどを keiomobile2 に接続するための諸設定をマンツーマンでサポートした。高い利便性を有する keiomobile2 を利用できる環境が整えられ、教育研究に活用可能となったと好評だった。



■「大学における発達障害を抱える学生へのサポート」

日時：2013年1月21日(月) 18:15～20:15

講師：萩原豪人氏(慶應義塾大学学生相談室カウンセラー)

近年、発達障害者に対する社会的認知・関心が高まり、その権利を擁護する国際条約や法律制度なども制定され、教育現場でも発達障害者の学ぶ権利が実現されるような対応が求められるようになっていく。その反面、教育の現場で学生に直接向き合う大学教員の間では、いまだに発達障害・発達障害者に対する認識が不足している。

今セミナーでは、まず発達障害、及びそれを廻る社会的状況に対する基本的な知識について説明がされた。その後、カウンセラーとしての知見から、発達障害のある学生が大学生活を送る上で、生活・学習・進路・就労などの場面で様々な困難に直面している状況が、具体例に基づきながら紹介された。それに対して、個々の教員としてどのような点に注意し、いついかなる援助を行うことができるかについて、示唆に富んだアドバイスがなされた。さらに、大学として、今後しっかりとしたサポート体制を構築すべきこと、また、その際に学内の諸部門間において、さらに学外の諸機関・家族との連携を図ることが重要であるとの提言がなされた。

(種村和史)

教員サポートワークショップ

LA
R&A

大学における 発達障害を抱える学生へのサポート

発達障害(LD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー障害等)を抱える学生やその家族にとって、少しずつではありますが、適切なサポートが受けられる社会に変化しつつあります。しかし、大学におけるサポートはまだ始まったばかりと言わざるを得ません。

「場の空気が読めない」
「レポートや課題がこなせない」
「就職の面接が通らない」...

このような困難に直面している学生に対して、大学ではどのようなサポートができるのか、どのような支援体制が必要とされているのか、実例を交えてお話ししたいと思います。

日 時： 1月21日(月) 18:15～20:00
場 所： 来往舎2F大会議室
講 師： 萩原豪人(慶應義塾大学学生相談室カウンセラー)
対 象： 慶應義塾の教員・教諭・職員
申 込： 教養研究センターHP
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/ から
※当日参加も大歓迎!!



教養研究センター(日吉学生部 学生支援部門)共催
お問い合わせ toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

4-2 研究の現場から

2011 年不破所長の発案で始まった来往舎の研究
者交流サロン「研究の現場から」は、和やかな雰囲気
の中で毎回 2 名の所員が自分の研究を紹介し談話す
るという企画である。2012 年度の会の概要は以下
の通り。

■ 第 4 回 2012 年 5 月 24 日(木)開催

講師：中尾麻伊香(日本学術振興会特別研究員(PD))

「原爆の病とイメージ：医学と文学の狭間で」

講師：不破有理(経済学部教授)

「小話『19 世紀のアーサー王』テキストの出版
をめぐる」

2012 年第 1 回目は、日本学術振興会特別研究員
として、医学史の鈴木晃仁先生の元でご活躍の中尾
先生と教養研究センター所長の不破先生にお話いた
だいた。中尾先生は、原爆のイメージを研究されて
おり、広島に投下される以前にそうした兵器やエネ
ルギーの可能性がどのように想像されてきたか、ま
た、それらが実際に投下後にどのように変容してい
くのか、特に、放射線障害といった原爆の人体への
影響が知られていく過程についてお話いただいた。
現場では、多くの質問やコメントが寄せられ、まさ
にこの会が「研究の現場」そのものとなった。不破先
生は、1485 年に出版されたトマス・マロリーによ
るアーサー王伝説の出版事情、読者層の違いによる
書籍の判型の相違などについて、実際の書籍を用い
て、お話していただいた。

■ 第 5 回 2012 年 10 月 11 日(木)開催

講師：岩下綾(法学部専任講師)

「フランソワ・ラブレーの描写技巧 - 修辞と
奇想のさじ加減」

講師：光田達矢(経済学部専任講師)

「馬が転ぶとき - 19 世紀のヨーロッパ都市の
対応」

2012 年度第 2 回目のお話は、法学部の岩下先生、
経済学部の光田先生にお願いした。岩下先生は、フ
ランス 16 世紀前半の作家ラブレーの作品を「描写」
という技巧に焦点をあてて研究されている。当日は、
古典からルネサンスにいたるまで蓄積されてきた多
くの修辞学や詩学、論理学などの分野での定義を利用
し、ラブレーが作中、どのようにイメージの操作
をしていったのかをお話いただいた。光田先生は、
長年ヨーロッパ各都市に欠かせない移動手段である

馬車に着目され研究をされている。当日は、都市部
から動物がどんどん姿を消していった時代におい
て、馬が路上で事故に巻き込まれるという特定の場
面を通して、そこに関わるさまざまな人々がどう動
物と接していたのかご紹介いただいた。

■ 第 6 回 2012 年 12 月 13 日(木)開催

講師：井奥洪二(経済学部教授)

「普通の人々のための再生医療～骨組織再生
材料の創製」

講師：伏見岳志(商学部准教授)

「小さな村の大きな海」

2013 年度第 3 回は、経済学部の井奥先生、商学部
の伏見先生に研究の一端をご紹介いただいた。井奥
先生には、まさに今最先端といえる再生医療の現場
についてお話いただいた。井奥先生は、iPS 細胞の
有用性が叫ばれる中、そこに潜む社会的な問題を指
摘され、それゆえに、再生医療の必要性を説かれて
いる。「現場」でのお話から参加者は、再生医療の在
り方に関してさまざまな知見を得ることができた。
伏見先生は、ポルトガル出身のユダヤ系移民に関し
てお話いただいた。ポルトガルが長い間、ユダヤ教
を禁止してきたこと、隠れユダヤ教の多くが移民を
強いられたことなど解説していただき、その上で、
迫害を受けた移民の中でも、とりわけポルトガル北
東部のカシュテロ・ブランコ村の出身者が各国に残
している資料を元に、家族、友人関係、移動の足跡
を出来るだけ細かく再構成するという地道な作業か
ら見えてくる移住者の姿をご紹介いただいた。

(篠原俊吾)



5 庄内セミナー

教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（以下、TTCK）を拠点として2008、09、10年度に開催した「庄内セミナー」（初年度は「鶴岡セミナー」）の実績と反省を踏まえ、2012年度には未来先導基金をいただいて、8月31日から9月3日にかけて「第三回庄内セミナー」を実施した。

セミナーの目的は「教養力」すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通した「教養」の基礎体力作りにある。その主要な趣旨は、① TTCK を拠点として新たな「学びの場」を開発すること、② 鳥海山・出羽三山、庄内平野、日本海に囲まれ、歴史・文化・自然・人の織りなす多彩な「生命（いのち）」に恵まれた庄内をフィールドとして多角的に「生命」について考える機会を提供すること、③ 現地での体験プログラムや講義、地元との交流を通して知的な吸収力・消化力、広範なコミュニケーション力を養うこと、の三点にある。

参加者がほぼ学生に限られてきた従来とは異なり、2012年度は参加者41名中社会人4名、大学院生3名の参加があった点、山伏修行体験に代表される実体験型メニューも充実した点でセミナーの意義もより深まったと思われる。

具体的には以下の活動を行った：

- (1) 事前準備：事前説明会・事前課題（「自分について」のレポート提出）。
- (2) 合宿セミナー：8月31日から9月3日（3泊4日）。プログラム概要は次の通り。
 - ①「生命」に関するマインドマップの作成
 - ②日本人の死生観——即身仏をめぐって：即身仏拝観（注連寺・大日坊）・両寺住職による解説・日本人の死生観や身体観に関する精神科医（医学部教授・加藤元一郎氏）による講義・対話と議論。
 - ③修験体験：山伏の指導によるレクチャーと一日

修験体験（山伏修行体験塾・太田一塾長による指導）。

- ④庄内文化論：さまざまな文化遺産や施設の見学（致道博物館、藩校致道館、藤沢周平記念館、松ヶ岡開墾場など）・地元講師による歴史・文化・社会などに関する講義（講師：致道博物館館長・酒井忠久氏、鶴岡総合研究所研究顧問・東山昭子氏）・対話と議論。
- ⑤先端生命科学研究所見学：「生命」にまつわる最先端研究の体験・対話と議論。
- ⑥セミナーのまとめ。

- (3) 事後課題・報告書（レポート集）作成：「生命について」をテーマとする課題レポートの提出と報告書の発行。
- (4) 関連企画の実施：日吉図書館、大学生協（日吉）の協力を得て、11月に展示企画「慶應義塾と庄内」（セミナー報告・写真展・先端生命研紹介など）、庄内フェア（物産展・書籍展・庄内ランチ提供）を実施。

セミナーの成果としては以下の5点が挙げられる。

- (1) 羽黒修験・即身仏などに見られる伝統的な死生観から TTCK の先端生命科学研究所の活動に見られる先端的な「生命」観に至る広範な「学び」の体験。
 - (2) 地元との交流による参加者の「地方・地域」への眼差しの広がりとそのによる相対的な視点の獲得（自立・自律力の涵養）。
 - (3) 社会人の参加による世代間交流の体験およびグループワークによるコミュニケーション力の涵養（社交力の育成）。
 - (4) フィールドワークを通じた体験的な「学び」の重要性の認識。
 - (5) 対話と議論を通じた言語化と発信能力の向上。
- （庄内セミナー <http://keio-up.net/shseminar/news.html>）
（羽田功）



山伏修行体験（滝行）



グループワーク（対話と議論）

1 三田の家

「三田の家」は、慶應義塾大学教員・学生・卒業生有志と三田商店街振興組合が共同運営する、大学の地域連携活動の拠点の一つである（2006年9月設立）。主な教員メンバーは、岡原正幸（文学部）、武山政直（経済学部）、坂倉杏介（グローバルセキュリティ研究所）、塩原良和（法学部）、手塚千鶴子（非常勤講師）、日向清人（外国語教育研究センター）、熊倉敬聡（理工学部）である。三田の家はまた、通常のキャンパスでは実現しがたい実験的で多様な授業、ワークショップ等を企画・実践する新しい学びの場でもある。そして、社会人や外国人（留学生）との多岐にわたる交流プログラムを立案・実施し、昨今の学生に欠けがちな「社交力（sociability）」を育成する。さらに中長期的には、もう一つの地域連携拠点「芝の家」と協力しつつ、真に21世紀にふさわしい新たな「学生街」の創出を目指す。それに向け、2012年度は、「三田自由大学」（仮称）の設立準備を目標とした。（なお、三田の家は、昨年度に続き、慶應義塾創立150年記念未来先導基金の助成を受けた。）

2012年度の主な活動内容は以下のとおりである。ただし、三田の家の活動は非常に多岐にわたるため、以下はそのごく一部である。1)「三田自由大学」の設立準備として、各メンバー・スタッフの大学観、現在の研究・活動のプレゼンテーションを数回に分けて行い、「三田自由大学」のコンセプトの練り上げを行った。2)岡原ゼミ、塩原ゼミがそれぞれ毎週金曜日と火曜日に、通常の教室では実現しがたい実験的授業・ワークショップを企画し実施した。3)手塚と日向が、毎週月曜日、外国人留学生と日本人学生との「小さな国際交流」プログラムを企画し実施した。4)塾生が主体となって企画するイベントなどの実施として例えば以下を行った。岡原ゼミの学生たちが「カルチュラルタイフーン広島大会」（7月13日～15日、広島女子学院大学）のブース企画としてパフォーマンスを上演した。また同ゼミの学生たちが、9月19日～23日、韓国の光州ビエンナーレと釜山ビエンナーレ会場にてゲリラパフォーマンスを行った。5)「芝の家」との共同企画の実施として、「ご近所イノベータ養成講座」研究会を4月より実施。講座自体の開講は、2013年4月の予定。6)その他の企画として、「時空を超えて東北を旅する」（2013年2月16日）を行った。東日本大震災から2年。九州を拠点に、詩、声、音楽を通じた東北支援の活動をつづける、目黒実、高月晶子、新井武人、saoriのユニットを

迎え、朗読と即興演奏の集いを開催した。

三田の家の今後であるが、賃貸物件のオーナーの都合により、大変残念ではあるが、2013年秋をもって活動を終了することとなった。ただし、発展的解消とするため、1)半年間をかけて、三田の家のクロージングを演出・実行していく。2)「三田自由大学」の設立に関しては、1年間のメンバー・スタッフ間の議論を通じて、よりいっそう具体的な準備のスキームを必要とすることが確認されたため、今後少なくともその準備も兼ね、二つのプログラムを展開するつもりである。①「芝二丁目場づくり研究所」（仮称）の開設。三田の家と姉妹関係にある芝の家の向かいに、新たにシェアオフィスとなる物件を借り、同研究所を立ち上げ、2013年4月より実験的に運営を行う予定。②港区との共同事業として、新橋六丁目に芝の家につぐ、第三の地域コミュニティづくりの拠点を立ち上げ、2014年4月より活動開始の予定である。

（熊倉敬聡）



「カルチュラルタイフーン広島大会」パフォーマンス



光州ビエンナーレーにて

2 カドベヤ

オルタナティブスペース「カドベヤ」は、文部科学省大学教育推進事業の社会連携活動の拠点として、2010年4月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立された。同年4月から、大学の授業の拠点としてのみならず、6月より毎週火曜日の夕方、からだを動かすこと（ダンス、体操等）、ことばをかけること（詩、手紙の創作等）、ともに食べることでつながる「動く教室」を開催し、近隣の寿地区および石川町の住民、横浜で働く人々、学生など様々なバックグラウンドを持った人たちの交流の場として機能してきた。

授業としては2010年度に法学部人文科学特論「寿プロジェクト」、および2011年度に法学部人文科学研究会「コミュニティを考える」が設置され、カドベヤを拠点として教育活動も展開されてきた。これらの授業は大学の外に出て、その地域で行われている活動に積極的に参加することから社会の成り立ちを体で学び、コミュニケーション能力を培うことを目標とする法学部の少人数科目である。

文部科学省の教育推進事業が2012年3月末日をもって終了となった。2012年以降はコトラボ合同会社が場の運営を行うこととなり、慶應義塾大学は、他大学とも協力して積極的に教育コンテンツを展開していった。具体的には法学部人文科学研究会（法学部横山千晶担当）と立教大学の西山志保研究会（社会学）とが合同ゼミを開催することにより、フィールドワークと調査をかさね、学生主体で町の在り方と未来像を考察した。同時にそれらの調査に基づいて後期には学生たちによるイベント、JOYnt Caféを計5回開催し、町の方々と交流、およびさまざまな人々の交流の場としてのイベントの有効性をアンケートによって調査した。2013年度には横浜国立大

学の研究会もこの合同ゼミに加わる予定である。

同時に2012年度は毎週火曜日を「カドベヤ・オープン DAY」とし、「動く教室」にかかわってきたメンバーが中心となって、より多くの人々が地元の居場所としてカドベヤを活用できる仕組みを考えた。具体的には毎週火曜日の13時より19時までを「足湯カフェ」の時間とし、地元の方々が気楽に立ち寄って自由に交流できる場を提供し、19時以降を「ストレッチとゆうめし」と名付けて、今までの「動く教室」を展開する場とした。オープン DAY の運営には生活保護の受給者をはじめとし地元の方々に積極的にかかわってもらうほか、「足湯カフェ」の時間帯に学生企画のJOYnt Caféを盛り込むことによって、人々の交流の流れを俯瞰できるようにした。このまちづくりと人々の居場所の設立という目的に関しては、「カドベヤ・オープン DAY」が公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が企画する地域文化サポート事業「ヨコハマアートサイト」の採択事業となったことも特筆に値する。2012年度は17団体が選ばれたが、寿地区をはじめとし、横浜市で活動する市民団体と連携を取りながら、横浜のまちづくりの中にカドベヤ自身が居場所を見出していったのも2012年度であった。教育事業に関しては慶應義塾大学の部門内調整費の支援を受けさせていただいたが、合同ゼミでの発表会に「アートサイト」の参加団体の方々が出席し、学生にアドバイスを下さるなど、幅広い方々に教育事業に加わっていただいた感がある。今後は今まで通りアーティストや住民の協力を受けながら、より広く大学と社会をつないでいく試みをカドベヤを中心として展開していく予定である。

（横山千晶）



3 日吉行事企画委員会 (HAPP)

【プロジェクトの内容と目標】

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、春の新入生歓迎行事、秋の公募企画行事の二本柱によって、2012年度も運営した。新入生歓迎セッションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行っている。一方、公募企画セッションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画を HAPP が後援するものである。新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終えている。この際、様々な行事の主催者として、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの2点に常に留意した。2012年度の新入生歓迎行事も、前年に続き、東日本大震災を意識した講演会などを主催した。他に特筆すべき企画として、岩名雅紀氏と長岡ユリ氏によって伝統になっている舞踏公演も行われ好評を博した。秋には、アイヌ文化についての展示なども行なわれたが、これについては議論のある問題であることを十分意識しつつ、専門家の意見も参考にして企画を実施した。

【現在の目標達成度】

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議(6月、12月、1月)を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で頻繁に打ち合わせを行っている。今年度も前年の2011年度に再改訂した理念に基づき企画を実施した。ホームページを参照してほしい(<http://happ.hc.keio.ac.jp/>)。

■ HAPP の活動の趣旨 ■

新入生を中心に全学生を対象として、様々な企画を通じて多様な「知」の在り方を提示し、大学のみならず生涯にわたる「学習」の意味と可能性を考える機会を提供することを目指している。各種行事は「心と体と頭と…」を総合テーマとして、平成6年度以降、毎年様々なイベントを運営、その趣旨は主に以下の3点としている。

- (1) 知識・言語表現偏重型学習からの脱却: 「知」の表現には、言語によるもの、身体によるもの、さらには先端的な技術を用いた表現など多様な形態が存在している。このことを具体的に体験することのできる機会を設けることで、「知」やその「学習」の意味を考えさせるきっかけとなることを目指している。
- (2) 学生・教職員による一体型の活動: 学生と教職員が一体となって行事の企画・運営を行うことで、キャンパスや大学への帰属感を高めると共に、一連の共同作業自体を通じて学生による自主的な「学習」体験の場を展開することを目指している。
- (3) 地域・社会への大学・キャンパスの開放: 行事を広く地域や社会に開放することで、「地域・社会に開かれた大学・キャンパス」実現の一助とすると共に、学生が地域住民・社会人との直接的な交流を通じて大学以外の世界に対する視野を獲得する貴重な機会となることを目指している。

(小菅隼人)



舞踏セッション The Return



舞踏セッション The Return

〔春の新生歓迎行事〕

NO.	企画名	概要	日程
1	塾長と日吉の森を歩こう	塾長と学生がともに日吉の森を散策	4/21（土）14：00 集合、14：30 開始。 まむし谷、来往舎イベントテラス、 来往舎大会議室。
2	【読書のすゝめ！】 日吉図書館ブックトーク	「教授：君い、本を読みたまえ。学生： ええーっ、本〜ん?!」。	5/11（金）16：30-18：00。 日吉図書館 1F セミナーコーナー。
3	【東日本大震災復興関連の講演会シリーズ】富山妙子作品展・講演会 「記憶の糸を紡ぐ—震災・戦争・女」	富山妙子氏の新作（3.11 の原発事故に 触発されたもの）を展示。講演会も開催。	展示会：5/8（火）～5/15（火）。 講演会：5/12（土）14 時～16 時。 来往舎 1F ギャラリー来往舎イベント テラス。
4	【東日本大震災復興関連の講演会シリーズ】講演会「震災はまだ終わっていない 南三陸の海の現状と今後」	南三陸町の川瀬撰（かわせおさむ）氏に よる講演。	6/1（金）17：00～19：00。 第4校舎B棟 12 番教室。
5	環境週間 2012	環境に関するイベント。	6/4（月）～6/9（土）。 日吉キャンパス。
6	舞踏セッション The Return：365 日の 魂へ	岩名雅紀氏と長岡ユリ氏による舞踏公演。	6/13（水）18：30 開演。 来往舎イベントテラス。
7	室内アンサンブル・フェスタⅡ	公募形式を含む室内楽を核とした演奏会 と公開マスタークラスからなるシリーズ。	7/2（月）、7/6（金）、7/14（土）、 7/18 日（水）。 来往舎シンポジウムスペース、藤原洋 記念ホール。
8	OTO の会新作コンサートシリーズ No.14 来往舎コンサート 秋・空・響 Part.3 OTO の余韻	邦楽を柱とした現代音楽コンサート。	10/6（土）。 来往舎シンポジウムスペース

〔秋の公募企画〕

NO.	企画名	概要	日程
1	演劇企画「iRobot？」	「ロボット」と「未来」をテーマとした演 劇。	10/3（水）18：30～20：00、 10/4（木）17：30～19：00。 来往舎イベントテラス。
2	Images of Hiyoshi	記憶・イメージを頼りに日吉を再現する 参加型インスタレーション。	展示：10/23（火）～10/31（水）終日。 ワークショップ：10/23（火）・25（木）・ 27（土）・29（月） 各日 12：00～ 14：00、16：00～18：00。
3	アイヌ文化の現在：さまざまな形、 さまざまな今	現代アイヌ文化を展示・ライブ・トーク 等で紹介。	展示：12/3（月）～12/8（土） 11：00～18：00。 ライブ：12/8（土）18：30～20：00 （18：00 開場）。 トークセッション：12/8（土） 14：00～15：30 展示：来往舎ギャラリースペース。 ライブ：来往舎イベントテラス。 トークセッション：来往舎ギャラリ スペース。

日吉キャンパス公開講座 運営委員会

日吉キャンパス公開講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスを中心として義塾が持つ知的リソースを広く地域社会に公開し、還元することを目標としている。2012年度においては、教養研究センター所員向け企画公募を行い、「東北の魅力再発見——復興の先へ」および「中国を視る目を養う」を採択した。前者企画案はこれを中核として大教室を用いた秋季講座「東北の魅力再発見——日本ってなんだろう」を開講し、初の試みとして教養研究センター主催・実施によるツアー企画「教養研究センター開所10周年企画——学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」との連携を試みた。また後者企画をもとに、これも新たな試みとして、各回ごとに受講可能な特別講座「中国を視る目を養う——日吉キャンパスから考える日中国交正常化40年」を開講した。

【秋期講座】「東北の魅力再発見——日本ってなんだろう」

昨今自明さを失いつつある日本のアイデンティティを再検討することを目標に、講座前半は東日本大震災復興支援企画として東北みちのくの歴史・文化の再発見を主なテーマとし、講座後半ではさらに視野を広げ、日常あるいは歴史の中に埋もれがちな日本像を多角的に見つめ直すことを行った。当講座は土曜開講、各回90分×2コマ、全8回、受講申込は全8回セット（受講料8,000円）とし、定員300名に対し受講者数322名、全回出席者数68名（21%）、平均年齢は64歳（最高齢88歳、最年少18歳）であった。各回の詳細は以下の通り。

9月29日

- 3時限 「東北学、新たなステージへ」
赤坂憲雄(学習院大学教授)
- 4時限 「東北の義経伝説と文芸・芸能」
佐谷眞木人(恵泉女学園大学人文学部教授)

10月6日

- 3時限 「東北の縄文文化から学ぶこと」
安藤広道(文学部教授)
- 4時限 「キリシタン時代の東北と蝦夷」
浅見雅一(文学部教授)

10月13日

- 3時限 「絵草紙を通した義経伝承とみちのく」
石川透(文学部教授)
- 4時限 「西行の足跡とおくのほそ道」
寺澤行忠(名誉教授)

10月20日

- 3時限 「海に開かれた三陸沿岸」
川島秀一(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科特任教授)
- 4時限 「流域で考える東日本大震災」
岸由二(経済学部教授)

10月27日

- 3時限 「福沢諭吉の見た日本人の長所と短所」
都倉武之(福澤研究センター准教授)
- 4時限 「ポスト3.11 日本の力、日本の未来へのシナリオ——宇宙、深海、そして環業革命へ」
山根一眞(ノンフィクション作家、獨協大学経済学部特任教授)

11月3日

- 3時限 「東路の道の果て——歌枕と古典劇」
村上湛(明星大学人文学部教授)
- 4時限 「伝統食の宝庫・東北の底力——発酵と東北人の知恵」
小泉武夫(農学者、発酵学者)

11月10日

- 3時限 「平成・全国花街(かがい)めぐり——80歳代現役芸者たちの生き様を追う」
浅原須美(ライター、『お座敷遊び』『東京六花街』著者)
- 4時限 「近代芸能としての「落語」」
松本尚久(放送作家、明星大学日本文化学部非常勤講師)

11月17日

- 3時限 「憧れのハワイ航路」
柳田利夫(文学部教授)
- 4時限 「「山島」としての日本列島」
安藤礼二(多摩美術大学美術学部准教授)

【教養研究センター開所 10 年記念企画】「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」

教養研究センター記念企画である当ツアーについても、「日吉キャンパス公開講座」に連携したものととして、ここで概略を述べる。当ツアーは教養研究センターにより企画され、募集・催行等の一切を JTB に委託することによって実現した。

A コース(義経・西行・芭蕉のみちのくを歩く)

2012 年 11 月 20 日(火)～11 月 22 日(木) 2 泊 3 日
講 師：石川透氏(文学部教授)

寺澤行忠(名誉教授)

津田真弓(経済学部准教授)

参加者：20 名

B コース(古層のみちのく——縄文文化に学ぶ)

2012 年 11 月 20 日(火)～11 月 22 日(木) 2 泊 3 日
講 師：須田英一(矢上地区文化財調査室助教)

不破有理(経済学部教授)

参加者：12 名

【特別講座】「中国を視る目を養う——日吉キャンパスから考える日中国交正常化 40 年」

2012 年に日中国交正常化 40 周年を迎えるにあたり、歴史的にも地理的にも大きな関わりを持ち、利害を共有する両国の関係において、中国を冷静に観察し、知的に考察し、関心と理解を深めることは急務である。当講座ではこれを踏まえ、日吉キャンパスに在籍する中国研究者がその最先端の研究成果を披露した。詳細は以下の通り。土曜開講、各回 90 分×2 コマ、全 4 回、受講申込は各回ごと(受講料 2,000 円)とし、受講者数は 220 名であった。

12 月 1 日

3 時限 「日中関係のめくえ——相互理解・相互信頼の可能性について」

段瑞聡(商学部教授)

4 時限 「現代中国社会におけるキリスト教の浸透と政治へのインパクト」

林秀光(法学部教授)

12 月 8 日

3 時限 「政治と道徳によって変わる『詩経』の読み方」

種村和史(商学部教授)

4 時限 「文学と革命と——魯迅・トルロッキー・毛沢東」長堀祐造(経済部教授)

12 月 15 日

3 時限 「中国の成長は続くのか?——経済成長パターンの転換と課題」

孟若燕(商学部准教授)

4 時限 「楊絳：カラクテルの知恵」

桜庭ゆみ子(商学部准教授)

12 月 22 日

3 時限 「日中戦争と文学——南京、そして重慶」

関根謙(文学部教授)

4 時限 「日中間の荒波——何から何をどうやって守るのか」

安田淳(法学部教授)

(坂本 光)

慶應義塾大学 教養研究センター企画

日吉キャンパス公開講座 そして

「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」へのお誘い

教養研究センターは平成 16 年から社会・地域連携の一環として慶應義塾の多様な研究成果を、毎年設定されたテーマに即して体系化し、知的要求の高い社会人の方々に日吉キャンパス公開講座として提供してまいりました。

このたび、震災から 1 年を経て、息の長い東北支援をめざして、JTB との連携による「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」を展開する運びとなりました。歴史に埋もれた多層な東北像を浮かび上げ、未来へのまなざしを向ける一助として、講義と学びを結び合わせ旅へとお招きいたします。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

慶應義塾大学教養研究センター所長
不破 有理

日吉キャンパス公開講座

2012 年 9 月 29 日(土)～11 月 17 日(土)

- ◆ 今年度のテーマ「日本ってなんだろう?」講座前半は東北みちのくの歴史・文化の再発見
- ◆ 16 回の連続講座シリーズ
- ◆ 期間中、慶應義塾図書館をご利用いただけます。

東北支援企画

「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」

JTB 主催 2 泊 3 日の旅 3 コース

2012 年 11 月 20 日(火)～22 日(木) 2 コース
23 日(金)～25 日(日) 1 コース

- ◆ 慶應義塾大学の教員による立案・企画
- ◆ テーマのある旅、ひと味違う探求の旅をご体験いただけます。
- ◆ 慶應義塾大学の教員 2 名が同行、現地での解説・講義を担当
- ◆ 知的発見の楽しみを旅と交流を通して深めていただけます。
- ◆ JTB 手配の添乗員が安心かつ信頼できるご案内をいたします。

5 サイエンス・カフェ

教養研究センター主催によるサイエンス・カフェは2007年の初夏の第1回から2012年クリスマスに開かれた第23回をもって終了し、次の第24回からは自然科学研究教育センターの主催によって続けられることとなった。このカフェの歩みをここで概観し、最後に全23回の話題と話者の記録をまとめる。

飲み物を片手に、気軽なスタイルでサイエンス談義に混じることのできるカフェ。日吉キャンパス来往舎の「サイエンス・カフェ」は、極東証券寄附講座『生命の教養学』の公開講座という位置づけで2007年初夏に開店した。当初からこちらが期待した通り、子供のお客様もかなり多く、大学の講義などではなかなか見られないような大変活発な質疑応答がみられた。このカフェで話題提供をする話し手にとっては、子供にもわかるような話し方を工夫する良い機会ともなるし、また、思いもかけない質問を受ける貴重な体験の場となってきた。

「通りがかりにちょっと寄ってみたいカフェ」であることを目指し、第10回までは事前申し込み不要としていたが、準備の都合上、第11回からはなるべく事前の連絡をお願いすることになり、その後、

参加希望者の増加により、ついに第14回からは定員を明示することになった。このように参加受付に関しては開店当初の気軽さがやや失われたが、それでも相変わらずカフェを開けば繁盛し、お客様には喜んで頂くことができた。

2011年の3月には日本動物学会の関東支部大会が日吉で開催されることになり、その中の「動物学ひろば」をカフェの代わりとして宣伝していたが、開催前日の3月11日、大地震が日吉キャンパスにも襲来し、中止となった。そのままサイエンスカフェはしばらく休業となり、2011年度は10月に1度だけ、つづく2012年度も12月に1度だけの開催となった。これはひとえに、すっかり怠惰になってしまったカフェマスターのせいであったことを認め、ここにお詫び申し上げる。主催が変わった今後も、カフェの活動によって大学の研究活動が社会に還元され、特に次代を担う若い伸びやかな頭脳にとって、良い時間空間が生成されることを期待している。

全23回の記録を以下にまとめる。

(鈴木 忠)

回数	日時	タイトル	講演者(所属は当時のまま)
第1回	2007年6月23日	クマムシの話	鈴木忠(医学部・生物学)
第2回	2007年9月1日	小さなクラゲの世界	武田典代(理工学部・生命情報)
第3回	2007年11月10日	コケを探して：フィールドサイエンスの楽しみ	有川智己(経済学部・生物学)
第4回	2008年1月26日	融合する脳と機械	牛場潤一(理工学部・生命情報)
第5回	2008年3月15日	うに！すし？！	中島陽子(文学部・生物学)
第6回	2008年5月17日	『若返り』の秘密と可能性をさぐる	高橋利幸(商学部・生物学)
第7回	2008年7月12日	人間と宇宙のかかわり——ガリレオから400年	表實(商学部・物理学)
第8回	2008年9月6日	実演！回転物体の不思議な運動	下村裕(法学部・物理学)
第9回	2008年11月22日	あなたもフェアブル！昆虫と話そう	上村佳孝(商学部・生物学)
第10回	2009年1月24日	天気のお話——いろんな雲を作ってみよう！	杉本憲彦(法学部・物理学)
第11回	2009年3月21日	サンゴは謎のかたまりっ！	服田昌之(お茶の水女子大学・理学部・生物学)
第12回	2009年5月30日	夜の森のにぎわい——野ねずみ達の暮らし	坂本信介(総研大・葉山／首都大・動物生態)
第13回	2009年7月18日	家族で暮らすハチの話	片田真一(経済学部・生物学)
第14回	2009年9月12日	身近で活躍する放射線～宇宙放射線から医療放射線まで～	井上浩義(医学部・化学)
第15回	2009年11月14日	アカテガニが守った～小網代の谷	岸由二(経済学部・生物学)
第16回	2010年1月23日	メダカの♂♀のはなし	四宮愛(法学部・生物学)
第17回	2010年3月27日	二枚貝を覗いてみよう	伊藤篤子(商学部・生物学)
第18回	2010年6月12日	田んぼのエビ～魚屋に並ばないエビ～	三本博之(商学部・生物学)
第19回	2010年10月2日	宇宙飛行士の見えない命綱～宇宙滞在期間を決める宇宙放射線被曝～	寺沢和洋(医学部・物理学)
第20回	2010年11月13日	ミクロのガラス細工～珪藻が地球を救う！？～	豊田健介(商学部・生物学)
第21回	2011年2月5日	ブラナリア～性と死をみつめて～	松本緑(理工学部・生命情報)
第22回	2011年10月22日	カメムシのおかあさんの置き土産～母から子へ伝えられる腸内細菌のひみつ～	細川貴弘(産業技術総合研究所・博士研究員)
第23回	2012年12月25日	君はプランクトンを見たか？～最新メタゲノム解析が解き明かす海洋微生物多様性の知られざる世界～(日本遺伝学会と共催)	五條堀孝(国立遺伝学研究所・日本遺伝学会会長)

1 教養研究センター 運営委員会委員

2012年4月1日～2013年3月31日在籍者
第6期(2011年10月1日～2013年9月30日)

教養研究センター担当常任理事

長谷山 彰

教養研究センター所長

不破有理

教養研究センター副所長

種村和史

吉田恭子(2012年9月まで)

篠原俊吾(2012年10月から)

大出 敦

教養研究センター事務長

柴田浩平(2012年10月31日まで)

武内孝治(2012年11月1日から)

文学部長

関根 謙

経済学部長

中村慎助

法学部長

大石 裕

商学部長

樋口美雄

医学部長

末松 誠

理工学部長

青山藤詞郎

総合政策学部長

國領二郎

環境情報学部長

村井 純

看護医療学部長

太田喜久子

薬学部長

増野匡彦

文学部日吉主任

斎藤太郎

経済学部日吉主任

青木健一郎

法学部日吉主任

武藤浩史

商学部日吉主任

英 知明

医学部日吉主任

長井孝紀

理工学部日吉主任

金田一真澄

薬学部日吉主任

池田年穂

体育研究所所長

植田史生

日吉メディアセンター所長

羽田 功

外国語教育研究センター所長

境 一三

自然科学研究教育センター所長

大場 茂

日吉研究室運営委員会委員長

小宮英敏

日吉キャンパス事務長

安田 博

日吉学生部事務長

石井宜明(2012年5月31日まで)

渡辺秀人(2012年6月1日から)

日吉メディアセンター事務長

風間茂彦(2012年10月31日まで)

市古みどり(2012年11月1日から)

日吉事務運営サービス課長

黒田修生

日吉 ITC 所長

種村和史

極東証券寄附講座運営委員会委員長

鈴木晃仁(2012年10月31日まで)

不破有理(2012年11月1日から)

基盤研究(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)座長

佐藤 望

基盤研究(社会・地域連携)代表

羽田 功

基盤研究(身体知プロジェクト)座長

特定研究(教育 GP)代表

武藤浩史

交流・連携プロジェクト代表

横山千晶

日吉行事企画委員会(HAPP)委員長

小菅隼人

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

坂本 光(2012年9月30日まで)

新島 進(2012年10月1日から)

2 教養研究センター 組織構成員

2011年4月1日～2012年3月31日

所長：不破有理(経)**副所長**：種村和史(商)、大出 敦(法)、
吉田恭子(文・2012年9月30日まで)、
篠原俊吾(法・2012年10月1日から)**コーディネーター**：佐藤 望(商)、金田一真澄(理)、
武藤浩史(法)、高桑和己(理)、吉田恭子(文)、
羽田 功(経)長田 進(経)、鈴木晃仁(経)、
熊倉敬聡(理)、横山千晶(法)、
前野隆司(SDM研究科)、小菅隼人(理)、
坂本 光(文・2012年9月30日まで)、
新島 進(経・2012年10月1日から)、
境 一三(経)、安田 博(キャンパス事務長)、
柴田浩平(教セ事務長・2012年10月31日まで)、
武内孝治(教セ事務長・2012年11月1日から)**広報担当**：吉田恭子(文・2012年9月30日まで)、
篠原俊吾(法・2012年10月1日から)**日吉行事企画委員会(HAPP)****委員長**：小菅隼人(理)**委員**：坂本 光(文)、石井 明(経)、不破有理(経)、
下村 裕(法)、佐藤 望(商)、
竹内美佳子(商)、森吉直子(商)、
小宮 繁(理)、森 泉(理)、杉山由希子(理)、
石手 靖(体研)、徳村光昭(保セ)、
安田 博(キャンパス事務長)、
黒田修生(運営サ)、加賀齊天(運営サ)、
河越太郎(学生部)、屋部 史(学生部)、
山崎健二(学生部)、
市古みどり(日吉メディアセ)、
酒見佳世(日吉メディアセ)、
日水邦昭(教養研究セ)、
富澤英治(外国語教育研究セ)、
尼崎彰男(社会・地域連携室)**極東証券寄附講座運営委員会****委員長**：鈴木晃仁(経・2012年10月31日まで)、
不破有理(経・2012年11月1日から)**委員**：種村和史(商)、大出 敦(法)、
吉田恭子(文・2012年9月30日まで)、
篠原俊吾(法・2012年10月1日から)**「生命の教養学」企画委員****企画委員長**：高桑和己(理)**委員**：赤江雄一(文・2012年8月31日まで)、
片山杜秀(法・2012年9月1日から)、
鈴木晃仁(経)、小野裕剛(法)、
小瀬村誠治(法)、高橋幸吉(商)、
鳥海 崇(体研)、
乙子 智(慶大出版会・2012年4月30日まで)、
渡邊絵里子(慶大出版会・2012年5月1日から)、
柴田浩平(教セ事務長・2012年10月31日まで)、
武内孝治(教セ事務長・2012年11月1日から)**日吉キャンパス公開講座運営委員会****委員長**：坂本 光(文・2012年9月30日まで)、
新島 進(経・2012年10月1日から)**委員**：不破有理(経)、大出 敦(法)、納富信留(文)、
石井 明(経)、
下村 裕(法・2012年9月30日まで)、
秋山豊子(法・2012年10月1日から)、
寺沢和洋(医)、山下一夫(理)、
前野隆司(SDM研究科)、佐々木玲子(体研)**住友生命保険寄附講座運営委員会****委員長**：佐藤 望(商)**委員**：不破有理(経)、種村和史(商)、大出 敦(法)、
吉田恭子(文・2012年9月30日まで)、
篠原俊吾(法・2012年10月1日から)**教養研究センター事務局**柴田浩平(事務長・2012年10月31日まで)、
武内孝治(事務長・2012年11月1日から)、
日水邦昭、山口 中、傳 小史

3 2012年度の主な活動記録

Date		Events
4	12日	第1回所長・副所長会議
	21日	HAPP 新入生歓迎行事「塾長と日吉の森を歩こう」
	26日	第1回コーディネートオフィス会議
	27日	カリキュラム研究報告書刊行
5	7日	「学び場プロジェクト」ピア・メンターによる学習相談アワー（7月19日まで）
	15日	ニューズレターNo.20 刊行
	8日～15日	HAPP 新入生歓迎行事「富山妙子作品展&講演会「記憶の糸を紡ぐ 震災・戦争・女」」
	18日～19日	未来先導基金 三田の家「霜田誠二ワークショップ（三田自由大学構想）」
	24日	第4回「研究の現場から」中尾麻伊香、不破有理（折井善果からの変更）
	31日	未来先導基金 三田の家「芸術の現在 松本哉講演会」
6	1日	HAPP 新入生歓迎行事「川瀬撰講演会「震災はまだ終わっていない 南三陸の海の現状と今後」」
	4日～9日	HAPP 新入生歓迎行事「環境週間 2012」
	5日	第2回所長・副所長会議
	7日	未来先導基金 三田の家「芸術の現在 上田假奈代講演会」
	12日	教員サポート「ソーシャルメディアの現状と活用——大学の価値を高める情報とは——」
	13日	HAPP 新入生歓迎行事「心を渡る、魂を渡す～ふたつの魂の舞踏（仮）」
	17日	未来先導基金 三田の家「佐渡の沖汁と『空喰いの橋』～ゼロから始める学生映画の作り方～」
	18日～29日	庄内セミナー関連企画「庄内フェア」
	23日	「学びの連携」プロジェクト 第1回公開セミナー「学生の主体性を育む教育方法の探究——ケースメソッドの効果的運用の試案——」
7	27日	教員サポート「keiomobile2を知ろう、使おう」
	2日	HAPP 新入生歓迎行事「バロック時代の生活——バロック・ヴァイオリン、リュート、チェンバロによる演奏会」
	3日	第3回所長・副所長会議
	5日	未来先導基金 三田の家「シリーズ『今、移住について考える』第1回「ダンサー JOU が提案する“スロー移住と複拠点生活のすすめ”」
	5日	第1回 論文の書き方セミナー「90でコツがわかる論文・レポートの書き方」（7/6,11の2時限,5時限にビデオ補講）
	6日	HAPP 新入生歓迎行事「室内アンサンブル・フェスタⅡ 室内楽マラソンコンサートⅡ」
	6日	学会・ワークショップ等開催支援（後援・名称のみ）「連続ワークショップ ソーシャライズ！——自分の旗を立てる」
	7～8日	学会・ワークショップ等開催支援「話しことばの言語学 第4回ワークショップ」
	14日	HAPP 新入生歓迎行事「竹内潮生バロック・ヴァイオリンマスタークラス」
	17日	第4回所長・副所長会議
	18日	HAPP 新入生歓迎行事「慶應義塾コレgium・ムジクム演奏会」（住友生命保険相互会社寄附講座「身体知・音楽Ⅰ」成果発表会）
	23日	アカスキ・ミニ講義撮影（23日、25日、26日）
	25日	アカスキ担当者全体会議
	25日	第2回コーディネートオフィス会議
8	6日～8日	「学びの連携」プロジェクト 実験授業「ケースメソッドを用いたクリティカル・リーディング」
	31日～9月3日	未来先導基金公募プログラム 庄内セミナー「庄内に学ぶ生命——いま取って生と死を考える」
9	5日	第1回運営委員会
	29日～	日吉キャンパス公開講座「東北の魅力再発見 日本ってなんだろう」（～11/17（土）まで毎週土曜全8回）
	29日	「学びの連携」プロジェクト 第2回公開セミナー「ポストデザイン・ポストシステムの方法論によるイノベーションの新たな地平開拓」
10	6日	HAPP 新入生歓迎行事 OTO の余韻
	10日	第5回所長・副所長会議
	11日	第5回「研究の現場から」光田達矢、岩下綾
	12日	第2回 論文の書き方セミナー「基本論文作成の心得」
	20日	【学会・ワークショップ等開催支援】＜共催＞「小柴昌俊先生 講演会「宇宙、人間、素粒子」」
	24日	「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」公開講座その1『ほかいびと』上映会＋北村皆雄監督とのトークセッション
	27日	【学会・ワークショップ等開催支援】KEIO フットサルアドベンチャー 2012
	30日	基盤研究「東京大学の秋季入学構想をめぐって」（久保文明氏）
	30日	第1回論文コンテストスタッフ会議

Date	Events
3 日	【学会・ワークショップ等開催支援】<後援>「猿の惑星」から学ぶヒトとサル——映像・シナリオに秘められたメッセージを読み解く——
3 日	「学びの連携」プロジェクト第3回公開セミナー「Alfred Lord Tennyson の詩 “The Lady of Shalott” を読み、分析し、創作する」
4 日	カドベヤ(おとなり市)、カドベヤまつり
5 日～	庄内セミナー関連企画「第3回庄内フェア」食す(～16日)、知る「慶應義塾と庄内」(～17日)、読む(～16日)、探す(～10日)
11 8 日	【学会・ワークショップ等開催支援】Hiyoshi Poetry Festival 6
11 11 日	クラシック・ヨコハマ 2012 大学連携コンサート 住友生命保険相互会社寄附講座事業「古楽器で奏でるバロック時代のトリオ・ソナタⅢ」
14 日	第3回コーディネートオフィス会議
15 日	庄内セミナー報告書刊行
18 日	カドベヤ(おとなり市)
20～22 日	学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録 (A コース：義経・西行・芭蕉のみちのくを歩く、B コース：古層のみちのく——縄文文化に学ぶ)
30 日	ニューズレターNo.21 刊行
1 日	【学会・ワークショップ等開催支援】「第16回日本レーザー・スポーツ医科学学会」
1 日～22 日	日吉キャンパス特別講座
4 日	第2回論文コンテストスタッフ会議
5 日	【学会・ワークショップ等開催支援】<共催>カリフォルニア大学パークレー校人類学部チャールズ・ブリッグス教授 講演・討論会
6 日	未来先導基金 三田の家「芸術の現在 松本哉講演会「就活しない生き方を考える」」
13 日	第6回「研究の現場から」井奥洪二、伏見岳志
14 日、15 日	【学会・ワークショップ等開催支援】「第6回アジア医学史学会」
16 日	クラシック・ヨコハマ 2012 大学連携コンサート 「ハイドン モーツァルト ベートーヴェンの弦楽四十奏曲」
19 日	【学会・ワークショップ等開催支援】「慶應義塾演劇ワークショップ no.1」
22 日	【学会・ワークショップ等開催支援】「朗読劇「都市日記～慶應日吉キャンパス冬」」
26 日	第6回所長・副所長会議
26 日	【学会・ワークショップ等開催支援】「朗読劇「都市日記～慶應日吉キャンパス冬」」
5 日	クラシック・ヨコハマ 2012 大学連携コンサート 住友生命保険相互会社寄附講座事業「慶應義塾大学コレギウム・ムジクム 合唱団・古楽アカデミー演奏会」
9 日	アーサー王研究会学生創作発表会(アルフレッド・テニス「シャロットの女」精読から創作へ)
12 日	【学会・ワークショップ等開催支援】<共催>科研基盤研究(A)「アーツ・アンド・クラフツと民藝」2012年度研究会分科会「地域社会：アーツ・アンド・クラフツと民藝運動」(ポスタータイトル：地域社会×アーツ・アンド・クラフツ×民藝)
16 日	クラシック・ヨコハマ 2012 大学連携コンサート 住友生命保険相互会社寄附講座事業「慶應義塾大学コレギウム・ムジクム演奏会」
16 日	第3回論文コンテストスタッフ会議
21 日	教員サポート「大学における発達障害を抱える学生へのサポート」
27 日	未来先導基金 三田の家「シリーズ『今、移住について考える』第2回「音楽家 中ムラサトコの語る愛媛への移住とミニライブ」
29 日	アカスキ・ミニ講義撮影
31 日	第7回所長・副所長会議
4 日	ピアメン 2012 年度反省会
5 日	論文コンテスト表彰式
5 日	第4回コーディネートオフィス会議
6 日	アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション
6 日	アカスキOB・OGリユニオン
16 日	未来先導基金 三田の家「時空を越えて東北を旅する」
26 日	人文科学研究会 カドベヤ J O Y nt Café 課外授業「カドベヤでクラシック」
4 日	第2回運営委員会
4 日	第4回論文コンテストスタッフ会議
4 日	【学会・ワークショップ等開催支援】現代小説(“The Novel Today”)
8 日	教養研究センター 2012 基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画「国際基督教大学(ICU)の3学期制とカリキュラム」
14 日	アカデミック・スキルズ映画祭
16 日	【学会・ワークショップ等開催支援】<共催>マラルメ・シンポジウム 2013 「マラルメは、現在……」
18 日	「学びの連携」プロジェクト 第4回公開セミナー「塾生による塾生のための半学半教の場作り」
18 日	第5回論文コンテストスタッフ会議
26 日	第8回所長・副所長会議
26 日	センター選書刊行(岡原)、アカデミック・スキルズ論文集刊行
31 日	

慶應義塾大学教養研究センター
2012年度 活動報告書

2013年7月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株)太平印刷社

©2013 Keio Research Center for
Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISBN978-4-903248-44-8

